



(題字は初代学長 山田守英氏)

第 128 号

平成19年 6 月 1 日

編集 旭 川 医 科 大 学
発行 教 務 部 学 生 支 援 課



「千望台から大雪山連峰」(上富良野町)

(写真撮影：学生支援課)

新入生を迎えて……………	八竹 直…………	2
Student Doctor……………	林 要喜知…………	3
看護学科新入生を迎えて……………	黒田 緑…………	4
平成19年度医学科入学者名簿……………		5
平成19年度看護学科入学者名簿……………		6
平成19年度看護学科第3年次編入学者名簿……………		6
新入生を迎えて		
医学科第6学年 向井 佑希…………		7
医学科第4学年 姫野 愛子…………		7
看護学科第4学年 黒木 慎一…………		8
看護学科第3学年 鹿又 史忠…………		8
旭川医科大学に入学して		
医学科第1学年 赤木 康司…………		9
医学科第1学年 山中 桜…………		9

医学科第1学年 猪狩 智生…………	10
医学科第1学年 安田さおり…………	10
看護学科第1学年 安藤 雅文…………	11
看護学科第1学年 吉田ひかり…………	11
外国人留学生一覧……………	12
平成19年度大学院入学者名簿……………	12
就任のご挨拶……………	加藤千津子…………13
授業評価の公表……………	14
平成19年度 入学式……………	48
平成18年度 学位記授与式……………	48
平成19年度 医学科・看護学科新入生合同研修会……………	49
教員の異動……………	50
医大祭2007のお知らせ……………	医大祭実行委員長…………50



新 入 生 を 迎 え て

旭川医科大学長 八 竹 直

入学者選抜の難関を突破し、本学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。私ども本学教職員は心からあなた方の入学を祝福し、歓迎しています。

医療にかかわって、病に苦しむ人たちのために役に立ちたいという高い志をもって医師や看護師の道を選ばれた皆さんに深く敬意を表しますとともに、たがいに切磋琢磨し、今後ともその志をより高めていかれることを心から願っています。

この旭川医科大学は昭和四十八年に設立され、すでに医学科では三千八名の医学士が巣立ち、平成八年に設置された看護学科からも五百三十六名の看護学士が世の中に出ています。また七百六十八名の方が医学博士の学位、五十二名の方が看護学修士の学位を取得されています。これらの方々は医療や保健行政の場で活躍されているだけでなく、全国の多くの教育機関で教員として医学教育や看護学教育にも携わっておられます。

また旭川医科大学は平成十六年四月から国立大学法人が運営する医科大学として気持ちも新たに再出発をしました。それに伴い大学の教育理念も新たにし、今までに増して優れた人材を養成、輩出したいものと考えています。

その理念とは豊かな人間性と幅広い学問的視野を有し、生命の尊厳と高い倫理観を持ち、高度な知識・技術を身につけた医療人及び研究者を育成する。また地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる。さらに教育、研究、医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師及び看護職者の養成に努めるというものです。

医療人は生涯にわたり常に学習に励み、知識と技術とを習得する必要があります。そのため医学科、看護学科ともに色々なカリキュラム改革を行ない、より実践的な教育を行っています。これによって医学科では六年の間に高度先進医療を理解し、さらにその知識を発展させる高度な専門教育を行う一方、

社会から求められている「ありふれた疾患をきちんと診断・治療し、緊急事態に対処できる医師」になる教育を行っています。また日々進歩発展する医学に対応するため生涯にわたって、自主的に学び続ける習慣を身につける問題解決型の学習方法を会得していただきます。また四年間の看護学科の教育においても看護専門職として現在の医学の進歩を理解しつつ、それに合った高いレベルの看護の質を維持しつづける学習を身につけていただきたいと考えています。

さて最近、危機的な地域医療の問題が大きく報じられています。この旭川医科大学は北海道、特に道北道東地域の地域医療に貢献することを期待して設立された大学であります。この事を充分念頭に置き、臨床実習などを通じて、地域・僻地住民の医療や福祉を理解し、それらに十分貢献しうる意欲と能力を養っていただきたいものと考えています。

この春から多くの知識・技術について学んでいただきますが、大学の授業時間内で学べる部分は医学・看護学のほんの一部にしか過ぎません。その裾野に広がる多くの知識は自ら学びとらなければなりません。

さらに医療人としては、自分自身の人間性を高めることが求められています。この事は知識・技術の獲得以上に難しいことですが、常に誠実で謙虚であること、さらに他人に対し深い思いやりの心や愛をもって接することが出発点でしょう。その上で人間としての在り方や生き方に関して深く考え、広い範囲の読書や社会活動等を通して、広く深い教養を身につけ、高い見識と品格を培うことが必要になります。

この春から、以上申しあげたことがらを心に留めていただき、心と知識と技能を大いに磨き、素晴らしい医療人として大成されますことを祈念し皆様を迎える言葉といたします



Student Doctor

医学科第1学年担当 林 要喜知

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。日々勉強に明け暮れた受験生活に終止符をうち、医師になるための学びを始められた皆さんには、充実感のある幸せな気持ちと新たな意欲で満ちあふれていることでしょう。中には何度も受験し、今春の合格までにエネルギーを使い果たしてしまった疲労困憊の学生さんもいるかもしれません。でも、入学して1ヶ月が過ぎ、この連休でも疲れを癒したことでしょから、そろそろ落ち着きを取り戻し、これからの将来に大きな希望を抱いて、勉学を始めていることと思います。

私も4月6日の入学式当日から学年担当として始動しており、できるだけ皆さんと接する機会を持ちたいと考えています。まだまだ、皆さんの顔と名前が一致しませんが、この2年間、出来る限り皆さんとは何度もお話を重ねたいと願っております。ですから、何か相談したいことがありましたら（勿論、何もなくても）、いつでも気軽に研究室に来て下さい。私も色々な仕事でばたばたしておりますが、都合がつく限り対応させていただきます。

入学生さんの皆さんに対する第一印象は、「実に多士多才な面々が揃っているな!」というものでした。この上なく heterogeneous な状況は、これからの皆さんの学習環境をとってもユニークで実りあるものにしてくれる筈です。年齢や互いのバックグラウンドが大きく異なろうと、同じ学年としてまとまり、グループダイナミクスを働かせてください。そうすれば、きっとすばらしい学びができるでしょうし、信頼できる人間関係もしっかりと構築できることでしょう。

連休明けからは、いよいよチュートリアル教育も始まり、共通科目の講義や実習も本格的に展開されています。早期体験実習でも、これまで経験したことのない何かに触れ、将来を考える切掛けになったことでしょう。1年生を毎年注意深く観察していると、チュートリアルを契機により積極的になっていく学生さんを少なからず見受けます。勿論、始めはチュートリアルでの発言を難しく感じたり、その教育方法になかなか慣れなかったりすることもあるでしょうが、1年を通して真面目に取り組むと、

座学だけでは気がつかない何かを学べたり、学習意欲が高まるようなチャンスに出会うこともあります。例えば、講義や実習の中でも様々な事柄を理解しようと、自己学習の時間や質問回数が増えていく学生がでていますし、よく理解できない問題について同級生と議論し合う人達もいました。興味をもった学習内容をより深めたいと考え、頻繁に研究室に出入りするようになった学生もいました。そのような場合、まだ講義を受けたことのない先生から直接指導を受け、研究室で実験の一部をも担当させてもらうこともあったようです。さらに、チュートリアル終了後に、自主的な勉強会や医療や社会問題に関する研究サークルを組織するグループもありました。

勿論、皆が皆形に現れる行動をとるわけではないでしょうが、積極的な学習態度が身に付いてくると、その後の教育にも望ましい効果がでているように感じられます。ですから、皆さんも手を抜かず、正直に学習課題に取り組み、どんどん興味を追い求めてほしいものですし、その過程で生じた疑問や質問なども出来る限り早い機会に解決するように、さらに積極的に働きかけを続けてほしいものです。単科大学という決して大きくない規模ですから、皆さんの心がけ次第でどんどん学ぶ環境が広がるでしょうし、学年や学科の異なる学生との交流も盛んになることでしょう。本学には様々な分野を専門とする熱心で優秀な先生が多くおられますから、皆さんの積極性や熱意にきっと応えてくださることでしょう。

受験時代は要領のよく効率的に勉強をしてきた方も多いでしょうが、本学では、腰を据えてしっかりと学習課題に取り組んでほしいものです。ER (emergency room) というTV番組は私の好きなものの一つですが、トレーニング中の student doctors を見る度に、医学生になったばかりの皆さんの数年後のイメージと重なる思いがします。本学での一つ一つの学びが医師としての将来に深く関わってくるのです。自覚をもって一步一步あゆみ始めて下さい。

(生命科学 教授)



看護学科新入生を迎えて

看護学科1学年担当 黒田 緑

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。
同じ日本の国とはいえ桜咲く入学式で新入生を迎えてきた私は地域による自然環境の違いをことあるごとに実感しているところです。

さて、皆さんが看護の道を選ばれた動機は様々であると思います。決して面接の時の答えのような絵に描いたような動機の持ち主ばかりではないと思います。これからの大学生活の中で看護の道を探求する根源となるものを培って頂きたいと思います。もちろん、確固たる目的を持って入学された方は目的を達成するための学びを積み重ねて頂きたいと思います。

ある専門職を選択する時に、絶対的な適応や不適応はないと私は思います。少しの得手不得手は存在するでしょう。もちろん学びに関する基本的能力が備わっていることが条件です。本学に入学された皆さんはそのハードルを越えていると認められ、選ばれた方々です。早い段階で自分の問題解決方略や課題達成方略を見いだす努力をし、自分の傾向に即した学習方法を見いだすことが肝要かと思います。

看護は人を相手にする領域です。周囲から様々な影響を受け、つかみ所のない「人」がケアの対象者です。これまでのマル・バツ選択式あるいは覚えるだけの知識ではこの曖昧模糊とした「人」の理解は十分にできません。また、「人」を対象とした実践の学問は他にもありますが、往々にして経験から学ぶことが多く、また実践の全てを言語化することが難しいという特徴があります。知識を詰め込んだ大きな頭だけでも、また、その場限りの思いつきの対応だけでも看護は成り立ちません。先ず一番大切なことは、自分を含め存在する人の尊厳について思い

を馳せてください。次に、基礎教育で学ぶ看護の基礎・基本を目をつぶってもできるようにしてください。この2つのことを深めることができ、対象者の反応を察知し、ケアに工夫を加えられるようになると良いと思います。たったこれだけのことですが4年間の教育期間が必要です。なぜならば基礎・基本はいろいろな意味で重要だからです。皆さんが学ぶ看護学の基礎・基本は現在の看護の水準を維持しています。大学で学ぶ基礎・基本技術を臨地実習で対象者に提供することは、いいかえれば良いケアを提供したと言えます。また、基礎・基本を守ることが医療で起こる問題からあなた方の身を守ってくれるのです。

「人」を相手とする領域にゴールはありません。「もっと、もっと良いケアは考えられませんか?」「患者さんは本当に何を求めているか考えてください」等と必ず問われることでしょう。今まで、よい子や優等生で過ごしてきた皆さんにとって、つらく思える時があるかも知れません。しかし、職業としてケアを提供することは、そのような学びの蓄積の先にしか存在しません。一方、学ぶことは大変なことばかりではありません。その答えは、これからお会いする患者さんたちが与えてくれると思います。

最後に、皆さんのクラスはまとまりがあり、助け合いの手がどこからか差し伸べられる、そんな明るいクラスになるのではないかと想像しています。グループや集団の力は思わぬところで発揮されることがあります。大切にしてください。相談事は早めに来室をお願いします。

(看護学科 教授)





新入生を迎えて

医学科第6学年 向井 佑希



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

苦しい入試を突破し、ホッと一息つくと同時に、今後の大学生活に向け、期待と希望を抱いていることと思います。

旭川医科大学は、勉強だけでなく、部活も盛んです。部活、アルバイト、遊びなどいろいろなことに挑戦して、自分の趣味や興味あるものを深めていて下さい。

また、せっかく北海道にいますので、北海道の寒冷な気候や美味しいもの、スポーツ（乗馬部など）も大いに楽しんでみてください。

5年生から始まる病院実習では、机上の勉強だけでは学べない、現場ならではの貴重な体験が出来ます。

す。

内科では、患者さんを担当して、診察をさせていただいたり、外科では、実際に術衣を着て、執刀医と同じ目線で手術見学をすることが出来ます。当直実習では、緊急性の高い患者さんが多く、生死の境に立ち会う場面もありました。医師の仕事の大変さを実感すると同時に、人の生命に深くかかわる仕事であるという、責任の重さを再確認しました。

6年間、というとな長そうな印象を受けがちですが、私自身、今年最終学年を迎え、改めて振り返ってみるととても早く過ぎ去っていったように思います。この6年間でどんなものにするかは、皆さん次第です。ときには壁にぶつかることもあるでしょうが、それを自分で乗り越えていく訓練を積むことは、今後の人生に大いにプラスになるはずです。

皆さんが、6年間終わって振り返ってみた時に、素直に良かったと思える、そんな大学生活を送れるよう、心から願っています。



新入生を迎えて

医学科第4学年 姫野 愛子



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これまで温めてきた願いが叶い、喜びでいっぱいのことと思います。それと同時に勉強、部活、一人暮らし、アルバイトなどまだまだ不安もたくさんあるのではないのでしょうか。

入学当時、私が一番不安に感じていたことは勉強に関してでした。試験の度にプレッシャーに押しつぶされそうになっていましたが、友達と助け合いながら乗り越えてきました。そして、大学生活が半分過ぎた今でさえ、どれだけ努力をしてもこの不安は消えていません。きっと、人の命を背負うということとはそれだけ重いということなのだと感じています。

また、部活に関して悩むことも多々ありました。同期の仲間、先輩、後輩、本当にたくさんの方に会

い、優しさに触れたため、こんな私でも部長としてチームをまとめることができました。部活を通して感じたことは今では全て、私にとっての大切な宝物です。そして、残りの大学生活もそんな風に思えるようなものになっていけばいいなと思っています。

大学生活で医学に関する知識を十分に学ぶことはとても大切なことだと思います。しかし、患者さんの力になるためにはただ単に、医療を施すだけではいけません。患者さんの立場になって考えられる温かい心や医療スタッフとの信頼関係を築くことも必要です。その為にも豊かな感性を持ち続け、見たこと、聞いたこと、経験したことなどをどう受け止めるかが重要だと思います。私たち医学生にとって大切なことは単に知識を詰め込むことよりも、むしろ幅広い意味での教養を今のうちに身につけておくことにあるのではないのでしょうか。

これから様々な経験を積み、大きく成長されていくことと思いますが、謙虚な気持ちと感謝の心を大切にして頑張ってください。皆さんが充実した大学生活を過ごされることを願っています。

新入生を迎えて

看護学科第4学年 黒木 慎一



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。多くの希望を持って来た人あるいは大きな不安を抱えながら来た人もいることでしょう。それはさておき、そろそろ大学生活にも慣れてきた頃でしょう。勉強に部活にバイトに忙しい日々を過ごしていることだと思います。そこで、僕が3年間本校で過ごしてきて、皆さんに伝えておきたいことを書きたいと思います。

大学では高校までとは違って、幅広い年齢層の人たちと友達になれます。同級生の中でも年齢は様々で、他の学年・学科も合わせると本当にたくさんの人と出会うことになると思います。色々な人生を歩んできた人生経験豊富な人と話すことはとても楽しいですし、自分の為にもなると思います。つまり、クラスや部活の縦や横のつながりの中で人間性を磨

いていくことができる、いざという時の助け舟となるということです。是非、「友達の輪」を広げていきましょう!!そして、困った時・悩んだ時はその友達や先輩に相談し、一緒に悩み、一緒に遊び、一緒に飲み、乗り切ってください。

また、大学生活では、やってみたいと思ったことに進んで挑戦してみてもはどうでしょうか。様々なことにチャレンジできる環境にいるということが大学生の特権の1つだと思います。勉強や部活、バイトはもちろんのこと、趣味や新しく挑戦してみたいと思ったことに一生懸命になるのも「青春」だと思います(笑)大学生活はあっという間に過ぎ去ってしまいます。まとまった時間がある大学生活を有効に使って、楽しく、悔いの残らないような4年間あるいは6年間にしていってください。

でも、何事にも頑張り過ぎは禁物です。人間には適度な息抜きが必要だと思います。幸いにして、旭川は北海道の中央に位置しています。しかも、あの有名な旭山動物園もあります。動物園の動物たちに癒されるのもいいですし、北海道の雄大な自然に癒されるのもいいと思います。とにかく、「頑張りすぎないこと」、これが大切です。

新入生を迎えて

看護学科第3学年 鹿又 史恵



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。入学した頃の期待と不安は今どのように変化しているのでしょうか? 私はというと大学生活で得た新たな期待とともに、将来に対する不安もありつつ、早くも過ぎた2年間という月日にただただ驚くばかりです。そんな大学生活を振り返り、何点かお話をしてみたいと思います。

いきなり勉強についてですが、学年が進むにつれ、基礎知識を蓄える1年生の講義がいかに大切であったかを実感します。私も1年生のときに3年生の先輩から「解剖と生理はしっかりやっておきなさい!!」と言われましたが、今になってまさしくその通りだったと感じるのです。とはいっても、1年生の時にはなかなか実感が持てないもので…。1年の半分近くはお休みという授業構成の中において自己学習

はとても大切になってきます。多少でも勉強を組み込んだ生活プランが、将来のあなたをちょびっと幸せにするかもしれませんね☆

しかし、何といっても遊びは大切です!! とある先輩に『今はお金はないが、時間と体力はある。働いたらお金と体力はあるが、時間はない。』と言われました。少し無理をしても遊んだ日々の思い出が、将来の豊かな心を育む、そんな風に信じてみたいですね☆ 幸い旭川は北海道を満喫するには最適な場所であると思います。部活を始め、多くの友達とぜひ北海道を駆け回ってみてください!!

また、アルバイトを通しての経験も他では得がたいものです。大学とはまた違った背景や考え方を持つ人達との出会いがあり、更に社会に半分足を踏み入れるというその新鮮さ!! ちなみに私は飲食店で働いていますが、医療とは離れた世界の日常を若い(!?)今のうちにこそ触れてみてはいかがでしょうか?

さて最後に、私が述べるまでもなく、大学に入ってやりたい事を皆さんはたくさんお持ちだと思います。その一つ一つを大切に、うまくバランスをつけ、自分なりの楽しい大学生活を送ってくださいね★

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 赤木 康 司



後期試験で合格通知を頂いたの
で、入学してから暫くして落ち着
くまで、目の回るような忙しさで
した。前期、後期どちらの大学で
も、勉強させていただける所なら
何処へでも行こうと思っていまし
たので、もし前期で合格していた

ならば自分は此処にはいないはずで
す。三十歳を過ぎて、もう一度勉強
しようと考えた時、旭川や北海道
という土地は、ほとんどイメージに
ありませんでした。何でも自分の力
で切り開いていけるような気持ち
でいた若い頃とは違い、自分の人
生において自分でコントロールで
きる部分の小ささを改めて感じ、
土地との縁、人との縁の不思議に
感慨を深くする毎日です。

旭川に引っ越してきて一番すばら
しいと感じるのは、空気の良さや
景色の雄大さなど環境の良さで
す。

夕方のグラウンドで沈んでいく夕
日を目にすると、都会ではなか
なか味わえないとても贅沢な気
分になります。下宿のすぐそばに
は忠別川が流れており、その土
手を歩いていると、とても気持
ちが晴れます。

もう一つ、すばらしいと感じるの
は学校の設備です。医科大学とし
ては当たり前の設備なのかも知
れませんが、図書館や情報処理
室や各講義室での映写システム
など、前に通っていた大学に比
べて、とてもすばらしいものに
感じます。

大学ではありませんが、付属の
大学病院の設備にも感心しまし
た。病院のコインランドリーを
一度利用した時、待ち時間に少
し院内を見てまわりましたが、
非常に清潔で設備も充実してい
るのを感じました。札幌医科大
学付属病院内にも、スターバッ
クスを建設する計画が進行中だ
というニュースを聞きました。病
院内に少しでも病院の外の世界
にあるはずのものが入って、病
院の非日常性が少なくなるとい
うことはとても大切なことだ
と思います。

すばらしい環境、設備を与えら
れていることによく感謝して、
これから難しい出来事も多い
と思いますが、一つ一つの物事
に丁寧に接していきたい、そ
う思います。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 山 中 桜



私が、今、この場にいること。
私が、今、ここに居場所を得て
授業を受けていること。

合格を知った直後から今もな
お、こうしていることを正直実
感できずにいます。

それは、私などが医師にはな
れないと自身の能力の限界を勝
手に決め付け、一度医師の道に
進むことを諦めかけたからなの
かもしれません。

しかし、自分の人生を切り開い
ていくのは自分自身だけであり、
このまま何となく生きてゆくこ
とだけはしたくないと強く思っ
ました。だからもう一度、夢に
近づくために頑張ってみよう、
そう決意し、現在があります。
内心では私にはとても叶えられ
ないと思っていたことだからこ
そ、合格が信じられずに夢を見
ているような心地なわけですが、
これからは気を引き締めて毎日
身に沁みるような学びをしてゆ

くのみです！私自身が私を諦め
ても、最後まで私を信じて諦め
ずに支えてくれた人たちにも心
から感謝しています。

ともあれ、どうやら運よく医
学生になることができ、受験を
通してやる前から諦めることは
絶対にしてはいけないことであ
り、また本気で願い、できる
限りの行動をすることの尊さを
この身をもって知ることが出来
ました。

これから先は想像もつかない
ような困難に直面したり、机上
の理想論では語りきれないよう
な現実に向き合ったりすること
ばかりでしょう。そんな中で
みんなの健康な生活をしっかり
サポートできる医師になれる
ように、まずは6年間で様々な
ことを学び、自信ある私を築く
努力をしていきたいです。きっ
と、その先にたくさんの人から
信頼される医師があると思う
から。

旭川医科大学にはユニークな
同級生や、優しく楽しい先輩
方、そして頼りになる先生方
ばかりで、こんな素敵な学校
が私の学びの場になったことを
とても幸せなことだと感じて
います。幅広い知識と視野を
兼ね備えた「優」な医師を目指
して、多くの仲間とともに精一
杯学んでいこうと意気込んで
います。

目標をしっかりと持って

医学科第1学年 猪狩 智生



「北海道民として北海道のための医療を実践したい。」

そんな気持ちを胸に私は旭川医科大学を受験し、入学することができました。私が旭川医科大学を選んだ理由は「自らが問題を見つけ、問題を解決する能力を身に着ける。」という自主性を重んじる校風に憧れてのことでした。

そして今、実際に入学してから1ヶ月の月日が経過し、その校風を実感できる多くの授業が始まっています。そんな充実した学校生活を今は楽しく送っています。

入学してから驚いたこと、それは同学年の人々が全国色々な所から来ているということでした。小学・中学・高校と北海道の地元の公立学校に通っていた私にとって本州や九州から来た人と同学年にな

る事は初めての経験でした。生活の中の小さな事、ささいな習慣の何から何まで本州の人とは違う点が多くあり、未だに慣れない点もありますが、これからも多くの人と接して行くことで少しずつ慣れて行けたらと思っています。

これから6年間、この旭川医科大学で勉強をしていくわけですが、先輩の方々から楽な事ばかりで無く、辛く苦しいテストも数々あると聞いています。確かに他の大学よりも夏休みが短く多忙な学生生活なのだと思います。しかし将来、人の命を扱う仕事に就くのだという自覚と誇りをしっかりと胸に刻み込みどんなに辛い勉強にも耐え抜き、しっかりとした知識を身につけて行きたいと思っています。また、しっかりとした人間関係を築き上げ将来医療職者として人間の“痛み”が理解できる様になる事も学生時代にできる大切なことだと考えています。そのためにも部活動や趣味など多くの物事を通して常識力を身につけ、人との関係の築き方も学んで行きたいです。

これからも共に同じ夢を抱きあう仲間達と切磋琢磨しながら理想の医師像を目指して頑張って行きたいです。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 安田 さおり



入学から早くも1ヶ月が過ぎました。思えば合格通知が届いた日、私はずっと抱いていた夢の医師への第一歩を踏み出せたことへの喜びはさることながら、土地勘も知り合いもゼロの北海道で1人で暮

らしていくことに対する大きな不安も感じていました。

しかし、入学後その不安は一気に払拭されました。先輩方は優しく面白い人ばかりで、先輩後輩の仲は良く、旭医の雰囲気には安心感があるように思いました。また、先輩達が企画してくれた新歓合宿などがきっかけで同級生の人とすぐに打ち解けることができました。今では大学生活にも慣れ、毎日がすごく楽しいです。

一方で、「自分は大学生になったんだな」と気が引き締まることもあります。当たり前ですが、授業形態は高校と全く違い、自分から積極的に学んでいくことの必要性を痛感しています。

自分はこれからの6年間で充実したものになりたいと思っています。それは学業面はもちろん、部活動やアルバイト、友人関係などもです。順調にいけば6年後、私達は医師として働くことになるわけですが、その際、医師には高度な知識と技術はもちろん、多忙な毎日を乗り切る体力と忍耐、老若男女様々な価値観を有した患者さん達と上手にコミュニケーションをはかれる能力など実に多くのものが求められると思います。私達に与えられた6年間は、医学生として人間として多くのことを学んでいたらあっという間に過ぎてしまうと思いますので、毎日毎日大切に、1つでも多くのことを学んでいき、将来医師として働く糧をこの大学でつかんでいきたいです。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 安藤 雅文



前期合格発表の日。緊張に押しつぶされそうになりながら、僕は旭医のホームページを開きました。

「70……あった！」思わず

ガッツポーズをして喜んだあの瞬間

間を今も鮮明に覚えています。合格した実感が湧かず、その日は3回もホームページで受験番号があることを確認しました。

そして雪の残る入学式から1か月。旭川でもようやく桜が咲き始め、日差しに春の訪れを感じる今日、この頃。僕は1か月前と相変わらず忙しい生活を送っています。何よりも大変なのは一人暮らしだと思います。初めて親元から離れて、慣れない掃除、洗

濯、料理……と気がついたら夜遅くなっていることもよくあります。ただ、そんな忙しさの中にも大学生らしい自由な時間があったり、看護師に近づいていることが実感できる講義があたり、充実した毎日を過ごしています。

また、部活では最後の最後まで悩んだ末、長年やってきたバスケットボールに決めました。最近の試合では、早速1年生も出してもらえて、大学のバスケットのレベルの高さに戸惑うことも多々ありますが、少しでもチームの力になれるようにがんばります。

大学生活においても、看護についても、まだまだわからないことばかりですが、何事にも挑戦する心を忘れずに、多くの人と触れ合うことで4年後には看護の知識と技術に加え、人間としても立派な看護師になれるように努力したいと思います。



旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 吉田 ひかり



昨年の10月に旭医のホームページでAO入試の合格発表を見た時は、まさかこんな早くに受験生活が終わってしまうとは思ってもいなかったもので、嬉しさよりもこれから何をすればいいのだろうとい

った戸惑いの気持ちでいっぱいでした。しかし、センター試験を受け終わってからは、その戸惑いの気持ちは不安へと変わっていきました。合格した気の緩みからか、旭医を受験することも出来ないような点数で、4月から、本当に周りのみんなについていけないかととても不安になりました。そんな不安な気持ちと期待の気持ちで旭川医科大学に入学してから、早くも1か月が経とうとしています。

この1か月は、とても早く過ぎたように感じました。入学してすぐの新歓合宿や毎日の講義を通してたくさんの人と知り合うことができました。毎日の講義では、専門的なものから、一般教養的なものまでと幅広いですが、とても興味深く聞くことができ、多くの知識を身につけることができています。また、部活では、同学年の繋がりだけではなくたくさんの優しい先輩方と関わるなかで、旭医の素晴らしい部分や先輩方の講義の内容などの話を聞くことができ、先輩方から学べるものがたくさんあります。先輩方を見習って、勉強と部活を両立し、楽しい大学生活を送れるよう努力していききたいと思います。

これから先もさらに多くの人と接する機会が増えていくと思いますが、その機会を大切にして、多くのことを吸収しながら、立派な看護師としてだけではなく、1人の人間としても成長して卒業できるように、これからの4年間を充実した大学生活にしていきたいと思っています。

◎外国人留学生在籍者一覧

平成19年4月1日現在

氏 名	国 籍	学 年	期 間	所 属
LIU, XIAO YU (刘 晓 宇)	中 国	博士課程 第3学年	2005.4.1～ 2009.3.31	細胞・器官系
MIREGULI, MAIMAITI (米热古丽 买买提)	中 国	博士課程 第2学年	2006.4.1～ 2010.3.31	生体情報調節系
NKOUAWA, AGATHE	カメルーン	博士課程 第1学年	2007.4.1～ 2011.3.31	医 学 専 攻
Ali Abd AL-Karim Talib	イ ラ ク	博士課程 第1学年	2007.4.1～ 2011.3.31	医 学 専 攻

平成19年度 大学院入学者名簿

博士課程

氏 名	専 攻	研究指導教員
杉 山 祥 晃	医 学	高 後 裕
松 田 佳 也	医 学	立 野 正 敏
安 部 達 也	医 学	葛 西 眞 一
森 健 一 郎	医 学	若 宮 伸 隆
山 田 康 輔	医 学	吉 田 貴 彦
西 田 恭 博	医 学	松 野 丈 夫
金 田 和 宏	医 学	飯 塚 一
玉 木 岳	医 学	柿 崎 秀 宏
中 西 啓 介	医 学	笹 嶋 唯 博
竹 田 安 孝	医 学	羽 田 勝 計
奥 村 俊 介	医 学	大 崎 能 伸
鈴 木 達 也	医 学	葛 西 眞 一
北 尾 直 也	医 学	高 井 章
笹 島 順 平	医 学	高 後 裕
中 林 征 吾	医 学	吉 田 晃 敏
石 居 信 人	医 学	吉 田 晃 敏
大 前 恒 明	医 学	吉 田 晃 敏
加 藤 浩 仁	医 学	松 野 丈 夫

氏 名	専 攻	研究指導教員
奈 田 利 恵	医 学	高 後 裕
NKOUAWA AGATHE	医 学	伊 藤 亮
Ali Abd Al-karim Talib	医 学	長谷部 直 幸
五十嵐 加弥乃	医 学	藤 枝 憲 二
浅 利 優	医 学	清 水 恵 子

修士課程

氏 名	専 攻	研究指導教員
村 上 智 広	看 護 学	望 月 吉 勝
佐 藤 慶 如	看 護 学	岩 元 純
大 友 勝 弘	看 護 学	北 村 久美子
笹 川 朝 子	看 護 学	黒 田 緑
横 山 詞 果	看 護 学	北 村 久美子
松 島 愛 子	看 護 学	北 村 久美子
森 浩 美	看 護 学	岡 田 洋 子
伊 東 弘 恵	看 護 学	望 月 吉 勝
福 本 きよみ	看 護 学	岡 田 洋 子
藤 田 麗 子	看 護 学	北 村 久美子
飴 村 光	看 護 学	木 村 昭 治



かたくり (男山自然公園)



就任のご挨拶

看護学講座（成人看護学）教授 加藤 千津子

平成19年4月1日付けで看護学講座（成人看護学及び看護情報学領域）教授を拝命致しました。少子高齢化が進み、価値観が多様化した現代社会を反映して看護基礎教育において、幅広い人間性と科学的思考に基いた看護実践能力の付与、そして自立した看護職の育成が求められています。微力ではありますがその職責が果たせるよう努力する所存です。

私は1973年に看護職としてスタートし、臨床における看護実践及び看護管理を15年間、病院情報システムの看護情報システム担当（一部継続看護も兼務）が10年間、本学看護学科で看護基礎教育（成人看護学&看護情報学）が3年間、そして病院の専任リスクマネジャーとして4年間勤務後、私立大学看護学部で看護情報学を2年間担当していました。新設されて間もない旭川医大病院に就職して30余年、新しい病棟の開設や看護情報システムの構築、専任リスクマネジャーとしての医療安全等への取り組み等を通して看護職として多くの学びを得ることができました。

看護基礎教育における大学化は急速に進展して2007年4月現在で157校となり、看護基礎教育の質（教育内容）及び量（教育年限）の充実が求められています。2005年度日本看護協会「看護師基礎教育のあり方に関する特別委員会中間答申」によると、「人格陶冶の教育」「看護過程の展開や生涯学習の基礎となる知識・思考力を培う教育」「一定の看護技術を修得するための教育」の三側面の重要性が示されました。「人格陶冶の教育」とは、人間を深く理解する教養の涵養、患者等の人権を尊重し、患者本位の視点で看護を提供する倫理観の醸成と、患者や職場関係者との信頼関係を築くことができる対人関係能力・コミュニケーション能力の育成であると述べています。看護の対象である人間を多様な視点から理解することは看護の基本であり、対人関係能力やコミュニケーション能力は看護実践の基盤となります。次に「看護過程の展開や生涯学習の基礎と

なる知識・思考力を培う教育」とは、患者の個別性を踏まえたアセスメント能力、特にフィジカルアセスメント能力の強化と、医療連携を理解し、促進する力となる地域ネットワークを活用した切れ目ない患者ケアの確保に必要な看護過程の展開及び予防的視点から見た患者教育の能力が挙げられます。1988年から10年間にわたり医療へのIT導入に関わり看護情報システムの構築を担当し、アセスメント能力を高めるための系統だったアセスメントツールの作成とその活用、共通用語としての看護診断の導入及び情報の共有、地域連携のための看護依頼書作成等のシステム構築を通して、特に看護基礎教育における思考力を培う必要性を感じていました。そして保健医療福祉における機能分担や連携の推進は、今後、さらに看護職としての専門的な知識・思考力・判断力が要求されるでしょう。また、専任リスクマネジャーとしての活動においては、医療安全は組織の体制整備とともに医療者の質の担保が不可欠であり、安全で質の高い看護を提供するには、看護基礎教育は基より生涯にわたって自己研鑽を図ることがますます重要です。次に「一定の看護技術を修得するための教育」とは、療養上の世話及び診療の補助行為に必要な知識と技術が確実に修得できることであり、とりわけ臨地看護学実習は臨場感のある体験学習を通して既習の知識や技術及び態度を学び、倫理観をより深く理解する機会となり得るものです。

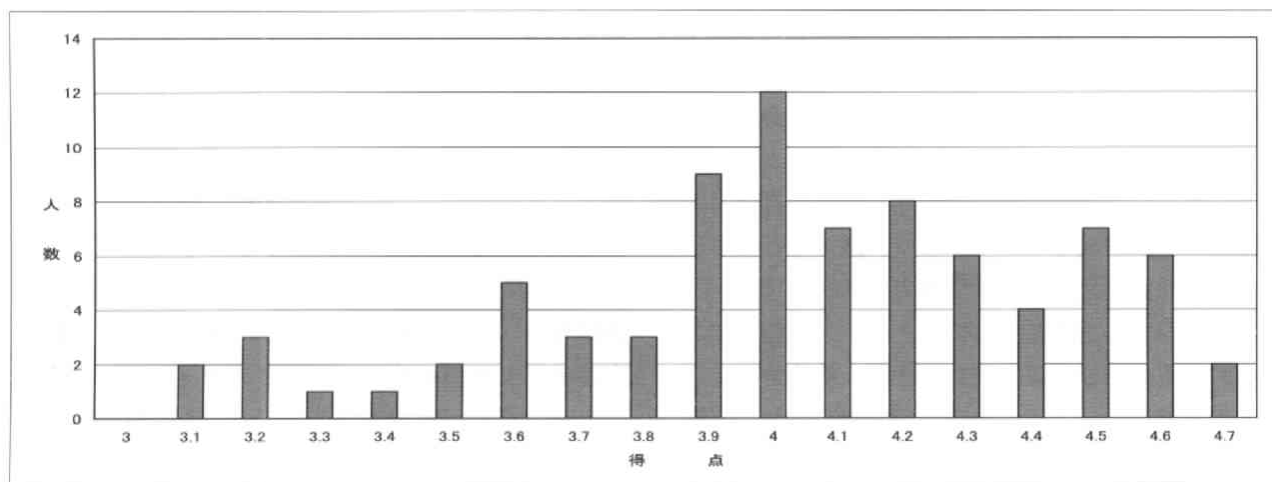
不確実性の高い現代の医療において成人看護学領域の教育を中心として、長年培った経験知も活かし、確かな知識や技術に裏付けされた思考力や問題解決能力をもつ自律した看護職の育成に努めたいと思います。また、研究活動では、成人看護学（慢性期）領域の「生活習慣病におけるセルフケア能力」、看護情報学領域の「看護用語の標準化」と「看護の質の評価」、そして現在は医療安全に関する「看護職の勤務中の眠気に関する疫学研究」に取り組んでいるところです。

学生による授業評価(平成18年度分)の結果公表について

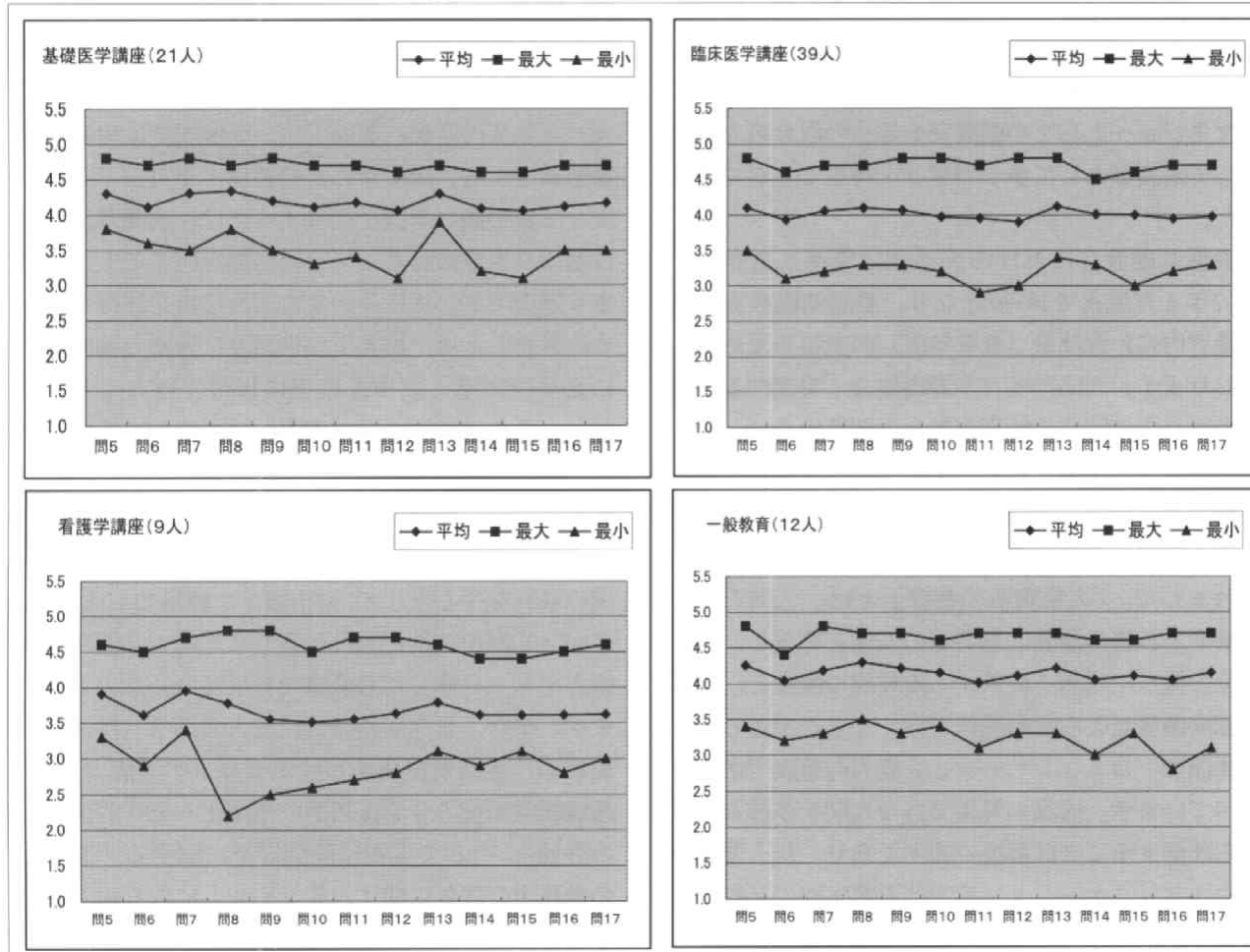
平成18年度後期「講義に対する学生評価」における全教員の得点分布

	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7
人数	0	2	3	1	1	2	5	3	3	9	12	7	8	6	4	7	6	2

(合計81名 平均4.0)



問5～17までの各平均点と最高・最低点



講義に対する学生評価

あなた自身について	問1 事前に履修要項や教科書を読むなど予習をしましたか。 問2 授業に毎回出席しましたか。 問3 授業中に授業内容を理解するための努力をしましたか。 問4 授業の復習・宿題を毎回しましたか。
講義計画	問5 各回の講義はよく準備がなされていましたか。 問6 履修要項は授業全体のポイントを理解する上で適切でしたか。
教育意欲・態度	問7 教育に対する情熱・熱意が感じられましたか。 問8 学生に接する態度は授業担当者として適切でしたか。
講義技術・内容	問9 明瞭で聞きとりやすい話し方でしたか。 問10 教材（プリント・スライド・板書など）は適切でしたか。 問11 講義において重要ポイントを強調してくれましたか。 問12 学生の反応を確かめながら講義していましたか。 問13 豊富な知識があり、かつ説明が論理的でしたか。 問14 授業の難易度は適切でしたか。 問15 各回の講義内容は量的に適切でしたか。 問16 今後の学習意欲を増す内容でしたか。
総合評価	問17 この授業は全体として満足できるものでしたか。

- ⑤ 強くそう思う（非常に良い）
④ やや思う（良い）
③ どちらとも言えない（普通）
② あまりそう思わない（あまり良くない）
① 全くそう思わない（良くない）

1

内科学講座（循環・呼吸・神経病態内科学分野） 長谷部 直 幸

科目名：基礎医学Ⅰ（医学科第2学年後期／必修科目）

日時：平成18年11月22日（水） 6講目

履修者数：98 配布数：66 回収数：61 回収率：92.4%

＊評価結果（平均）

問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.8	4.6	4.7	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.5	4.5	4.7	4.7

＊授業評価に対するコメント

循環・呼吸・神経病態内科学分野 長谷部 直 幸

今回の学生の高い評価は、大変嬉しく、光栄であり、素直に感動しております。循環器学の面白さを伝えようとする「分かる授業」への努力を評価してもらえたものと嬉しく思います。評価対象の講義のみならず、全学年で担当する他の40数コマの講義全てが同様の評価ならば、本物と言えるものと自戒します。今回の講義は、学会出張のため5、6講目の補講枠に臨時追加したもので、反発と悪評を覚悟しましたが、むしろこれが、より学習意欲の高い学生の出席と高評価に繋がったのかもしれない。問14、15の難易度と量的な面では更に改善を図りたいと思います。教える者のモチベーションを高めてくれる嬉しい評価に重ねて感謝し、更に精進したいと思います。

2

生理学講座（神経機能分野） 高草木 薫

科目名：基礎医学Ⅰ（医学科第2学年後期／必修科目）

日時：平成19年1月24日（水） 2講目

履修者数：98 配布数：56 回収数：37 回収率：66.1%

*評価結果（平均）

問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.8	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.5	4.7	4.4	4.4	4.7	4.7

*授業評価に対するコメント

生理学講座（神経機能分野） 高草木 薫

講義に際しまして、学生諸君からこのような高い評価を戴きましたことは、医学教育に携わる者として非常に嬉しい限りです。生理学は統合の科学であり、脳神経生理学はその際たる領域です。即ち、脳神経系の機能を理解するためには、正確な神経解剖の知識も要求される訳であり、機能（生理学）と構造（解剖学）の有機的統合という作業が、脳神経生理学を“難しい”と感じさせています。そこで、私は“必要最低限の最重要項目を要領良く学生さんに訴えること”に重点を置いて講義をしています。その反面、講義で伝え切れなかった内容も数多くあります。その部分は、平先生の解剖図譜と私の講義資料などを参考に、自己学習によって補って戴きたいと考えています。

3

解剖学講座（機能形態学分野） 吉田 成孝

科目名：基礎医学Ⅰ（医学科第2学年後期／必修科目）

日時：平成18年11月8日（水） 1講目

履修者数：98 配布数：57 回収数：49 回収率：86.0%

評価結果（平均）

問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.6	4.6	4.6	4.7	4.7	4.6	4.7	4.6	4.7	4.5	4.3	4.6	4.6

授業評価に対するコメント

解剖学講座（機能形態学分野） 吉田 成孝

講義に対する学生評価が高かったという。なぜなのかを考えてみた。多分それは私の学生時代の成績が芳しくなかった事によるのではないだろうか。当時私が受けた教育は最先端の研究をしているだろう先生方が自分の好きな事を好きな様に話すということが多かった。そのため、授業の時には理解できなかったことが卒業してから”なるほどそういうことだったのか”と思い当たることもよくあった。今はその経験を生かすべく、なるべく理解してもらうように授業を構成しているつもりだ。ただ、私はわかりやすい講義の成績も芳しくなかったから誤解のない様に。一番大切なのは授業のやり方より、どれだけ自分で進んで勉強するかどうかだろう。

以下4. 4以上（上位20%内）の教員は次のとおりです。（*五十音順）

所 属 名	教 員 名	科 目 名		日 時	学年	履修者数	配付数	回収数	回収率(%)
内科学講座	伊藤 博史	選択必修コースⅢ・Ⅳ 「糖尿病・内分泌Up-Dateコース」	選択必修	平成19年2月2日(金)1講目	医3・4	116	91	32	35.2
非常勤講師	江口 尚文	経済学	選択	平成19年1月24日(水)2講目	選択	21	20	20	100.0
薬理学講座	川辺 淳一	基礎医学Ⅱ	必修	平成18年10月26日(木)2講目	医2	98	79	53	67.1
非常勤講師	黒川 伸一	法学	選択	平成19年1月24日(水)2講目	選択	23	21	21	100.0
病理学講座	小林 博也	生命科学Ⅶ	必修	平成19年1月5日(金)5講目	医1	91	37	37	100.0
心 理 学	高橋 雅治	生命科学Ⅴ	必修	平成18年11月9日(木)3講目	医1	91	84	84	100.0
産婦人科学講座	田熊 直之	生命科学Ⅵ	必修	平成18年10月27日(金)5講目	医1	89	84	76	90.5
英 語	内藤 永	医学英語Ⅰ	必修	平成18年12月5日(火)3講目 平成18年12月8日(金)6講目	医1	87	76	73	96.1
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	林 達也	臓器別・系別講義Ⅵ	必修	平成18年12月14日(木)1講目	医3	96	47	24	51.1
看護学科	藤井 智子	在宅看護学	必修	平成19年1月30日(火)3講目	看2	70	70	70	100.0
非常勤講師	松田 剛	心理学Ⅱ	必修	平成18年11月27日(月)3講目	看2	70	69	68	98.6
英 語	三好 暢博	英 語 Ⅱ	必修	平成18年10月30日(月)4・5講目	看2	64	61	58	95.1
病理学講座	柳沼 裕二	基礎医学Ⅱ	必修	平成19年1月10日(水)1講目	医2	97	50	43	86.0
寄生虫学講座	山崎 浩	基礎医学Ⅱ	必修	平成18年11月16日(木)3講目	医2	98	60	40	66.7
病理学講座	吉江 真澄	基礎医学Ⅰ	必修	平成18年12月13日(水)3講目	医2	98	50	48	96.0
眼科学講座	吉田 晃敏	臓器別・系別講義Ⅵ	必修	平成18年12月20日(水)3講目	医3	96	91	80	87.9

科目全体の講義企画に対する学生評価

あなた自身について	問1 事前に履修要項や教科書を読むなど予習をしましたか。 問2 授業に毎回出席しましたか。 問3 授業中に授業内容を理解するための努力をしましたか。 問4 授業の復習・宿題を毎回しましたか。
科目構成	問5 科目全体の履修目的は、履修要項やガイダンスで明確に示されましたか。 問6 履修主題間および教員間で、内容の過度な重複は避けられていましたか。 問7 各履修主題に割り当てられた時間のバランスは適切でしたか。 問8 各担当教員は履修主題に沿って授業を行いましたか。
科目内容	問9 各履修主題の難易度は適切でしたか。 問10 科目全体の内容は理解しやすいものでしたか。 問11 科目全体の履修の目的は最終的に達成されましたか。 問12 科目全体の内容は今後の学習意欲を増すものでしたか。 問13 試験や提出物（レポートなど）の量と内容は適切でしたか。
総合評価	問14 この授業は全体として満足できるものでしたか。

- ⑤ 強くそう思う（非常に良い）
④ やや思う（良い）
③ どちらとも言えない（普通）
② あまりそう思わない（あまり良くない）
① 全くそう思わない（良くない）

科目名：社会医学基礎Ⅱ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：88 配布数：88 回収数：87 回収率：98.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.7	3.8	3.3	2.8	3.4	3.6	3.5	3.5	3.5	3.3	3.4	3.2	3.4
問14	問15	問16	問17	問18								
3.3												

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅱコーディネーター 松岡悦子

社会医学基礎Ⅱは、非常勤の先生と社会学の松岡とで担当しています。科目名が社会医学となっているために、公衆衛生の内容を連想させ、科目名と中味が合っていないというコメントがありました。確かに医学部において社会医学という名がついていると、まずは公衆衛生を連想するでしょう。ところが、この科目の中味は、生命倫理が中心で、それに社会科学的側面からみた医学についての位置づけの話が加わります。学生の人たちがとまどうのも無理がないかもしれません。医学を幅広い視点からとらえることの重要性を、今後も学生の人たちに伝えていかねばならないと思います。

科目名：生命科学Ⅳ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：87 配布数：86 回収数：86 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.9	3.8	3.6	3.0	3.6	3.8	3.6	3.8	3.3	3.0	3.4	3.1	3.3
問14	問15	問16	問17	問18								
3.3												

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅳコーディネーター 中村正雄

昨年度に比べ全体的にやや低い評価を得ている。今年の変更点は、中村担当の物理化学分野（生体熱力学、反応速度論など）9コマ分を前期の最後に移し、中間試験を行ったことです。出題の範囲が絞られたためか、成績は全体として昨年よりややよい結果でした。

個別のコメントでは、講義の進め方、講義内容のまとめ方といった参考になる指摘がありました。講義中に使用していた教科書と参考書について説明が不十分で混乱を与えたことも評価を下げた理由かと思います。

皆さんの質問を受けながら講義を進め、一方向的な講義を避けたいと考えています。理解できなかったことを後に残さず、是非質問することを期待しています。来年度は宍戸（助教）が講義に加わります。今年度よりも、より丁寧な講義を目指すつもりです。

科目名：生命科学Ⅴ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：87 配布数：86 回収数：86 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	4.0	3.9	3.2	3.9	4.2	4.1	4.2	4.2	4.2	4.2	4.1	4.1
問14	問15	問16	問17	問18								
4.2												

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅴコーディネーター 高橋雅治

生命科学Ⅴは、医療に必要な基礎心理学、臨床心理学、発達心理学を学ぶための講義である。

「科目構成」の4項目については、3.9から4.2という評価が得られた。これは、すべての講義が心理学研究室のスタッフにより行われたこと、及び、講義の内容を毎年改善してきたことによると考えられる。また、「科目内容」の4項目についても、4.1から4.2という評価が得られた。これは、毎年行っている配付資料の改訂や講義資料のマルチメディア化によるものと思われる。

一方、学生自身についての評価では、予習と復習についての評価が3.0と3.2であった。今後は、予習・復習についての指導が必要であると思われる。

また、自由記載のコメントで、試験の記述量が多すぎるという意見があった。今後は、試験の内容についても改善を検討する予定である。

科目名：生命科学Ⅵ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：87 配布数：86 回収数：86 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	3.9	4.0	3.3	4.0	3.8	3.8	4.0	3.9	3.8	4.0	4.1	3.8
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅵコーディネーター 林 要喜知

生命科学Ⅵの評価平均点数（問4～14）は3.92であり、昨年3.95、一昨年は3.81と比べると、評価が落ち着いてきたように感じる。学生からの具体的なコメントには、1）オムニバス方式の担当教員数が多すぎる、2）講義内容にもっと統一性をもたせてほしい、3）教員の評価は個別にしたほうがよい（そうでないと評価をフィードバックする意味がない）というコメントが昨年に続いて出された。これらの点に関しては、担当教員が交代するタイミング時に、1）や2）の点で少しずつ対応はしてきており、今後も、各教員間での連携をとりながら改善を図りたいと考えている。また、4）講義内容はとても興味深いし、5）モチベーションが上がる講義であったというコメントもあり、各担当教員の熱意や努力が評価されたものと判断される。試験実施のあり方や連続した講義を改めるなどの点についても、さらに改善していきたいと考えている。

科目名：生命科学Ⅶ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：90 配布数：89 回収数：87 回収率：97.8%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	3.6	3.9	3.4	4.0	4.0	3.8	4.0	3.7	3.7	3.9	4.0	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9												

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅶコーディネーター 渡部 剛

本科目の企画・展開方法に関しては、この数年間のブラッシュアップによってほぼ確立され学生からの評価も4点前後で推移している。ただ、今年度は、チュートリアルを展開時期変更に伴い、夏休み明け直後から本科目が始まったため、生物学の素養が足りない一部学生には大変だったようである。この日程は来年度以降も変わらないようだが、展開時期の問題に関しては教務係が作成した時間割に従わざるを得ず、我々にはどうすることもできない。この期間に人体組織学を習得できなかった学生は、4年終了時の共用試験までに自学自習で理解を深めていくしかないが、何か組織学の領域で質問・疑問が生じた場合には、いつでも気軽に担当教官まで尋ねに来て欲しい。

科目名：社会医学基礎Ⅳ（医学科第2学年後期／必修）

履修者数：98 配布数：97 回収数：89 回収率：91.8%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.7	4.2	3.6	2.9	3.5	3.5	3.4	3.6	3.4	3.4	3.4	3.2	3.3
問14	問15	問16	問17	問18								
3.1												

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅳコーディネーター 松岡悦子

社会医学基礎Ⅳは、非常勤の先生と社会学の松岡とで担当し、医師－患者関係や患者の権利などを授業のテーマにしています。しかし、科目名が社会医学となっているために、1年生の社会医学基礎Ⅱについてもそうですが、哲学や生命倫理という中味に違和感をもたれることが多いようです。しかも、倫理という個人の価値観にかかわることには踏み込まれたくないというコメントがありました。つまり、授業で倫理を扱う必要はないのではないかという意見です。倫理を個人や個別のものから、より広い普遍性をもつものへと変えていかねばならない社会状況を考えた時に、こういう学生からの根本的な問いかけに答えるには、短い授業時間だけでは不十分だと感じます。本当は、こういう学生のホンネをもとに、もっとディスカッションできる授業をやりたいと思っています。

科目名：基礎医学Ⅰ（医学科第2学年後期／必修）

履修者数：98 配布数：98 回収数：91 回収率：92.9%

*評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.5	4.0	4.2	3.3	4.3	3.9	3.7	4.2	3.9	3.8	4.0	4.5	3.8
問14	問15	問16	問17	問18								
4.1												

*評価に対するコメント

基礎医学Ⅰコーディネーター 高井 章

- 担当教官の講義の進め方に関する設問である問5～問14については、平均ポイント4.02で、昨年（4.1）とほぼ同じ水準に達し、全体として、本実習科目が昨年度と同様、学生にかなりよく評価されたものと考えられる。
- 問12「科目全体の内容は今後の学習意欲を増すものでしたか」が、この本科目アンケートの中でも最高である4.5という高ポイントを得たことが特にうれしい。
- 問7「各履修主題に割当てられた時間のバランスは適切でしたか」が、昨年度と同じ3.7ポイントと問5～問14の中で最低になった。「自由記載欄」に書かれた意見にも分野ごとのコマ数配分に関する不満の記載があった。来年度の本科目の編成上の参考にしたい。
- 「自由記載欄」には他に、一部学習内容の難解さと分量の多さ、試験の難しさについての不平の記述がめだつた。いかにして豊富な内容を要領よく教えるか、という点になお一層の工夫が求められているようである。

科目名：基礎医学Ⅱ（医学科第2学年後期／必修）

履修者数：98 配布数：79 回収数：60 回収率：75.9%

*評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	4.4	4.1	3.2	3.9	3.9	3.8	4.1	3.9	3.8	3.9	4.0	3.5
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

*評価に対するコメント

基礎医学Ⅱコーディネーター 若宮 伸隆

過去3年間の本講義に対する評価点数の推移を見てみると、講義内容に関する項目である問5～問13の平均点数は、H16年度＝3.611、H17年度＝3.844、H18年度＝3.866であり、総合評価点数である問14の平均点数は、H16年度＝3.6、H17年度＝3.8、H18年度＝4.0でした。このデータは、学生諸君の本講義に対する好感度が年度を追う毎に高くなっていることを示しており、次年度以降も、このレベルの向上を目指したいと思います。

自由記載欄には、基礎医学Ⅱの企画方針を良しとするコメントが複数ある一方で、薬理学、微生物学、寄生虫学の3領域の「期末試験が一挙に来るのは重い」として、3領域の講義を並列展開ではなく、直列に繋いで「試験を分散して欲しい」とのコメントも見られましたが、恐らく、試験を分散したらしたで、やはり別の重圧感が生まれるものと思われますので、短期間に実施される国家試験に備える意味合いも含めて、現在の並列展開を継続したいと考えています。

科目名：基礎医学特論（医学科第2学年後期／必修）

履修者数：98 配布数：47 回収数：43 回収率：91.5%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.3	4.2	3.6	2.6	3.8	4.3	4.0	4.2	3.4	3.4	3.7	3.9	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
3.7												

＊評価に対するコメント

基礎医学特論コーディネーター 柏 柳 誠

総合評価が、平成16年度 3.4、平成17年度 3.5、平成18年度 3.7とわずかではあるが上昇する傾向が見られている。今年の個別意見を集約すると、興味深い（7件）、難解（4件）、特論の時間を一般的な講義に変更（4件）となった。昨年、一昨年と興味深いと難解という評価が拮抗していたが、今年は興味深いという意見が多い傾向がみられた。難易度に関する問9の評価は平成16年度 3.3、平成17年度 3.2、平成18年度 3.4とあまり変わらなかった。一方、基礎医学特論の目標である学生の科学的興味を喚起することを評価する問12の値は、平成16年度 3.5、平成17年度 3.6、平成18年度 3.9と徐々に上昇している。これは、最先端の話題を提供するためにどうしても難解な点はあるが、それを補う魅力的な講義を講師の諸先生が展開していることを示唆するものと思われる。

科目名：臨床医学概論Ⅱ（医学科第3学年後期／必修）

履修者数：96 配布数：96 回収数：93 回収率：96.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.9	4.1	3.6	3.1	4.0	4.2	4.2	4.2	4.2	4.1	4.1	3.8	4.2
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

＊評価に対するコメント

臨床医学概論Ⅱコーディネーター 藤 尾 均

医学科3年生を対象とする15コマ1単位の必修科目である。健康科学講座スタッフが6コマ、法医学講座スタッフ（塩野副学長を含む）が4コマを担当し、残り5コマを筆者が担当した。例年と同じく授業内容の多くが「社会医学」系であり、「臨床医学」云々という科目名とそぐわない。現行カリキュラムの矛盾を集約したような科目であり、いつも学生には申し訳ないと思っている。にもかかわらず評価点が高いのは、ひとえに、CBTや国家試験に役立つはずの無理・無駄・斑（むら）のない択一形式の期末試験（50問60分）の賜物であろう。自由記載欄における学生の批判的意見としては、「公衆衛生と法医学を同一科目でやるには頭の切り替えが行いにくい」「環境分野が難しい」「創意工夫のない講義がある」などが目に付いた。科目内容が今後の学習意欲を増すものであったか否かを尋ねた問12の評価が他の問に比べて若干低いのも気になる。改善していきたい。

科目名：臓器別・系別講義Ⅱ（医学科第3学年後期／必修）

履修者数：96 配布数：95 回収数：72 回収率：75.8%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.2	4.1	3.9	3.3	3.9	3.9	3.7	3.9	3.6	3.6	3.7	3.7	3.3
問14	問15	問16	問17	問18								
3.7												

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅱコーディネーター 羽田 勝 計

臓器別・系別講義Ⅱは、内分泌、栄養、代謝、腎泌尿器系疾患に関連し、四つの講座により担当されているが、これらの多岐にわたる疾患の内容を60コマの講義時間内で習得することは非常に困難が予想され、メッセージにも記載したように、積極的な自学自習の態度が期待される所であった。各項目担当教官は、できるだけオーバーラップを少なくし、効率よく理解・習得できるよう工夫を行ったと自負していたが、実際のアンケートの結果では、予習および復習が不十分に留まり、試験のボリュームが相対的に大きいと感じられたことと思われる。今後は、積極的に、効率的な授業内容の習得に貢献できるような工夫をしつつ展開していきたいと考えている。

科目名：臓器別・系別講義Ⅲ（医学科第3学年後期／必修）

履修者数：96 配布数：83 回収数：62 回収率：74.7%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.2	4.0	3.5	4.1	4.2	3.9	4.2	3.9	3.9	4.1	4.0	3.8
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅲコーディネーター 高 後 裕

臓器別・系別講義Ⅲは、膠原病、感染症、血液病学を対象とした講義である。学生の総合評価は4.0とほぼ満足してもらえたようである。各科で重複していた項目を整理しており、科目構成に関しては比較的高く評価されているように思われる。毎年、学生の自由意見には、授業内容に対して時間数が足りないとの意見が多いが、講義の時間が多いからといって多くの知識が得られるというわけではない。従来型の一方的な知識の押しつけではなく、4学年で予定されているチュートリアルや、5学年以降の臨床クラークシップを通して、知識の不十分な点や、疑問点を明らかにし、それらを自ら積極的に学習することで解決するという態度・習慣を身につけてもらいたい。

科目名：臓器別・系別講義Ⅴ（医学科第3学年後期／必修）

履修者数：96 配布数：95 回収数：50 回収率：52.6%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	4.0	3.9	3.2	4.1	4.0	3.8	4.1	3.9	3.9	4.0	4.1	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅴコーディネーター 千葉 茂

本講は、脳、脊髄、および末梢神経系の解剖と機能を念頭に置きながら、精神神経学にかかわる広範な医学・医療を学ぶことを目的とする。講義は、内科、小児科、脳神経外科、放射線医学、精神医学の教員で行われた。学生の総合的評価は4.0であり、一応の良い評価を得たと考えている。昨年、学生から「講義の統一性に欠ける」との指摘があったが、その点が改善されたことも関係していると思われる。脳神経分野は難解であり、講義のコマ数を増やして欲しいとの希望があった。確かにそのとおりであるが、教授方法もさらに工夫すべきであろう。学生の希望で目立つのは、講義の内容をプリントで残してほしいというものである。パワーポイントと音声だけの講義は、進行が速すぎてノートを取ることが出来ず、しかも記憶の彼方に消えていくというわけである。担当教員には、プリントを残すようにお願いしたい。

科目名：臓器別・系別講義Ⅵ（医学科第3学年後期／必修）

履修者数：96 配布数：95 回収数：74 回収率：77.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.1	3.8	3.3	4.1	4.0	4.0	4.1	3.9	4.0	4.0	4.0	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9												

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅵコーディネーター 吉田 晃 敏

この臓器別・系別講義Ⅵは、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科の4科で行う105コマの講義であり、統一性に乏しく、しかも膨大な量の知識が要求される講義コースでもある。学生にとっては昨年同様関連性のない分野の講義を大量に受け、しかも試験を60分間で一度にやる事に対しての不満があった。この指摘は2年間連続したものであり、改善の必要があると思う。

それぞれの科の講義には興味を持って頂いた様で、この点は有難く、各講座の教員に感謝したい。

科目名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床感染症学コース」(医学科第3・4学年後期／選択必修)
履修者数：72 配布数：72 回収数：69 回収率：95.8%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.4	4.3	3.9	3.5	4.1	4.0	4.1	4.3	4.0	4.0	4.0	4.1	3.9
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床感染症学コース」コーディネーター 若宮伸隆

本コースの評価は昨年度とほぼ同等で、学生諸君には好評価を戴いたと思います。学外からお招きした各領域の専門家による最前線の講義も含めて、全体として「面白かった」とのコメントが多く、今後もこの方針を維持したいと思います。一方で、出欠確認の方法と取扱いについて問題点があることを、学生諸君も教員も気づきました。次年度から、出席カードの取扱法を工夫して、誰もが納得出来る方式を実施する予定です。講義内容については、今後も好評価を維持すべく工夫を重ねたいと思います。

科目名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「ニューロサイエンスコース」(医学科第3・4学年後期／必修)
履修者数：55 配布数：47 回収数：31 回収率：66.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.1	4.7	3.9	3.3	4.1	4.2	4.3	4.3	3.7	3.7	3.8	3.9	4.2
問14	問15	問16	問17	問18								
4.2												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「ニューロサイエンスコース」コーディネーター 吉田成孝

選択必修の授業も3年目となり教員と学生双方共に定着した感がある。神経系はその複雑な機能ゆえに、現在でも科学者のみならず多くの人の興味をかきたてる分野である。その反面、生理的にも病態的にも包括的な理解はなかなか難しい。本コースは通常の講義だけでは理解が難しいが、未知なる世界をできるだけわかりやすく紹介したいとの思いから開講している。学生からの評価もほぼ例年通りの結果となったが、全体としての満足度は高くなった。これは、多分教員と学生双方にこのコースに対する理解が深まったものだと考える。今後も今回寄せられた声を参考にしさらによりよいコースとしていきたい。ただ、2年前よりは少し改善されたが大半の学生がいわゆる「内職」をしている現状は何とかならないだろうか。

科目名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床薬理学コース」(医学科第3・4学年後期／選択必修)
履修者数：12 配布数：12 回収数：12 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.8	4.4	4.4	3.4	3.8	4.1	3.9	4.0	3.9	3.9	3.9	4.0	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床薬理学コース」コーディネーター 牛首文隆

臨床薬理学コースでは、基礎薬理学で学んだ薬物が、実際の臨床の場でどのように用いられるかを学ぶことを目的としている。このため、臨床・基礎各科の先生方に御自身の専門分野の薬物を中心とした講義を行って頂いた。講義内容は、薬物の処方、様々な疾患の薬物療法とその問題点、法医学における薬物、医療経済等多彩である。一方、本コースは3、4年生合同の講義であり、そのカリキュラム進行度の違いから、当初は学年間で講義理解度に差がでる危惧を抱いた。しかし、高度な問題群からなる試験の結果は、両学年ともほぼ同じ高い正答率であり、学生諸君の努力と講義の質の高さが窺われた。本コースでは、今後も各科の先生方に御協力頂き、臨床の場で即戦力となるような知識の学生諸君への提供を目指したい。

科目名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「生体構造機能蛋白・病態解析コース」
(医学科第3・4学年後期／選択必修)

履修者数：45 配布数：27 回収数：19 回収率：70.4%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	3.8	3.5	3.1	3.8	3.9	3.8	4.0	3.7	3.6	3.8	3.8	3.8
問14	問15	問16	問17	問18								
3.7												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「生体構造機能蛋白・病態解析コース」コーディネーター 伊藤喜久

今年度も、昨年同様応分の評価を頂きました。多くの講演者により、基礎から臨床応用まで幅広く、多くの専門領域に渡る内容でしたが、比較的バランスよく一定の質を保って、講義を行うことができ、うれしく思っています。本講義の目的は、遺伝子、タンパク質科学の切り口から新しい視点から医学、医療を見つめなおしていただくことに主眼があり、新しい発見や知識の整理に少しでも資することが出来れば幸いです。従って、レポートは講義に臨みそこから得た、もっともコアとそれぞれが考えるものを報告していただくことにしています。

講義資料の提供については、各講義担当者の判断に仰いでいますが、出来る限り提供していただけるよう引き続き努めてみます。

科目名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「臨床腫瘍学コース」(医学科第3・4学年後期／必修)

履修者数：66 配布数：66 回収数：62 回収率：93.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.5	3.8	3.4	4.2	4.3	4.2	4.3	4.1	4.1	4.1	4.2	4.4
問14	問15	問16	問17	問18								
4.3												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「臨床腫瘍学コース」コーディネーター 高 後 裕

臨床腫瘍学コースは、癌に関する基礎的・臨床的話題から臨床試験、緩和医療に至るまで幅広い領域を診療科の枠を超えて学習するコースである。昨年同様70名近くの学生が選択したが、出席に関する自己評価が4.5と大変高く、総合評価も4.3と大変良い評価であった。それぞれの専門家による得意分野の講義で、学生も興味深く出席し、その内容にも満足してもらえたものと考えられる。本コースでは、講義の内容が広汎にわたることから講義を担当いただいた先生に数問の問題とその解答・解説の作成をお願いし、あらかじめ学生に公開し、その中から試験するという方法を採用している。学生の試験に関する評価が高く好評だった。癌治療に関する専門医制度が整備されつつあり、今後益々内容が充実されていくものと期待している。

科目名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「加齢と適応の医学コース」(医学科第3・4学年後期／必修)

履修者数：89 配布数：50 回収数：20 回収率：40.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.1	4.2	3.7	3.5	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8	3.8	3.9
問14	問15	問16	問17	問18								
3.8												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「加齢と適応の医学コース」コーディネーター 松 野 丈 夫

人間が生きていくにあたって、誰一人避けては通れない「加齢」をテーマに据えたコースであり、第1病理、第1内科、精神科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、産婦人科、薬剤部に講義を依頼させて頂き、ご協力頂きました。

3年生と4年生に対する合同講義であり、殆ど全く臨床知識のない3年生と、既に臓器別・系別講義を履修し終わっている4年生とのレベルの差があり、各講師の先生達もその点でご苦労されたと聞いております。そのためか、一部の3年生の学生からは「講義内容について行けない点がある」、あるいは4年生の学生からは「系別講義の復習のようである」等の指摘も受けておりますが、それでも評価としては何とか合格点に達しているのではないかと受け止めております。また、基礎知識の差があるグループに対して、このコースの評価を行わなければならない難しさもありました。

科目名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「メンタルヘルスコース」(医学科第3・4学年後期／選択必修)
履修者数：19 配布数：19 回収数：19 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.9	4.4	4.2	3.4	3.9	3.5	3.8	4.1	4.0	4.1	4.1	3.8	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「メンタルヘルスコース」コーディネーター 千葉 茂

「21世紀は脳と心の世紀」といわれている。メンタルヘルスコースでは、心理学、医学、医療現場、社会学などのさまざまな観点から人間の精神現象を見つめるコースである。学際的で多角的に展開されるコースであるため、予習や復習は行いにいが、講義内容は大変興味あるものばかりと思っている。とくに、実際に医療の第一線におられる医師に担当していただく講義が増えたことは意義深いと思われる。講義内容は、全体として4.0とよい評価が得られた。ただ、内容の重複する部分があったとの指摘を受けた。このような指摘をすることができるのは、講義に集中している優秀な学生と思われる。いろいろな学問分野から講義がなされる場合には避けられない点であるが、調整も必要であろう。成績評価は、多肢選択の試験を実施したが、教えた側として満足のいくものであった。

科目名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「EBM・CPCコース」(医学科第3・4学年後期／選択必修)
履修者数：8 配布数：8 回収数：8 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.5	4.8	4.6	4.1	4.6	4.6	4.5	4.7	4.6	4.7	4.6	4.7	4.6
問14	問15	問16	問17	問18								
4.7												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「EBM・CPCコース」コーディネーター 奥村 利勝

選択必修コース「EBM・CPCコース」は昨年度より開講した。30コマの中で前半16コマをEBMコース、後半14コマをCPCコースで構成し、即臨床実習・研修で役立つ生きた知識・考え方を習得出来るよう心がけた。選択者は、昨年度と異なり、3年生の選択者は0で全員4年生であった。臨床医学の講義がほぼ終了する4年生の最後の時期の方が、このコースをより深く学習できることを反映しているのかも知れない。選択者の人数が少数ではあるが、総合評価は4.7で昨年の4.3から更に上昇した。今後の学習意欲を増すかの項目も4.7と満足できるものであり内容や進め方は適切と判断している。受講した学生からのコメントもとても勉強になったとするもののみでnegativeなものはなく、次年度も同様なコマ割りでコースを構築する。

科目名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「救急・プライマリケアコース」

(医学科第3・4学年後期／選択必修)

履修者数：12 配布数：11 回収数：11 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.0	4.6	4.4	4.0	4.5	4.5	4.5	4.7	4.6	4.8	4.8	4.7	4.5
問14	問15	問16	問17	問18								
4.7												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「救急・プライマリケアコース」コーディネーター 郷 一 知

本コースは、少人数で、できるだけプラクティカルな講義と、参加者個々が自分で考える機会を設定することを目指して設定した。

全体として4点から5点の評価を頂き、参加した学生からのコメントの内容からも、概ね目標としたところは実行できたかに思われる。しかし、他の講義と重複する部分も少なくなく、履修主題によっては実習形式や参加型の講義が困難なものもあり、参加人数を限らなくてはならないという制約もあるので、これらは今後の課題であると思っている。

医学は生ものと同じで、日々変化していくものであり、今日の常識が明日の非常識となりうる。身体と頭を常に動かし続ける医師の育成に少しでも役に立てれば幸いである。

科目名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「臨床遺伝学コース」(医学科第3・4学年後期／選択必修)

履修者数：6 配布数：6 回収数：6 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.6	4.5	3.6	4.1	4.3	4.5	4.6	4.1	4.1	4.5	4.6	4.5
問14	問15	問16	問17	問18								
4.6												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「臨床遺伝学コース」コーディネーター 藤 枝 憲 二

臨床遺伝学は、疾患別で講義される遺伝にかかわる情報の統合講義を目的に設立されています。最終的に患者さんに伝える場合の問題点を理解してもらうために遺伝カウンセリングの「ロールプレイ」を導入しています。少人数での開講が続いており、受講後の学生評価でも4.5を下ることのない評価を得ており講師陣も授業内容に自信を持っていますが、今年は、看板である「ロールプレイ」の実施最低ラインである6人しか受講生がいなかったのが残念です。「医学部講義にはないゼミナール形式」「気楽に質問できる雰囲気」との評価も得ております。来年度は、より多くの受講生を迎えて、内容のアップデートに追われる人類遺伝学の臨床応用分野の進歩をレビューしていきたいと考えています。

科目名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「感覚器医学の最先端コース」

(医学科第3・4学年後期／選択必修)

履修者数：60 配布数：53 回収数：29 回収率：54.7%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	4.1	3.2	2.9	3.7	3.8	3.8	4.0	3.8	3.8	3.7	3.6	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
3.7												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「感覚器医学の最先端コース」コーディネーター 吉田 晃 敏

「感覚器医学の最先端」に関して、14名の講師がそれぞれの立場から講義をされた。学生達も、各担当教員が履修主題に沿って授業を行っていた事には満足している（問8）が、科目全体の内容が今後の学習意欲を増すものかに関しては、3.6（問12）であり、これは昨年の4.4から明らかに低下しており、必ずしも授業の真意が伝わってはいなかったようである。また、系別講義のくり返しや復習であることを指摘する意見もあり、今後抜本的な全体のカリキュラムの改訂を強く望む意見もあった。来年度は、系別講義との違いを明らかにするよう、努力したい。

科目名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「糖尿病・内分泌Up-Dateコース」

(医学科第3・4学年後期／選択必修)

履修者数：115 配布数：103 回収数：45 回収率：43.7%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.2	4.5	3.9	3.4	3.9	4.0	3.9	4.0	3.7	3.7	3.8	3.8	4.2
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0												

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「糖尿病・内分泌Up-Dateコース」コーディネーター 羽田 勝 計

選択必修コースⅢ・Ⅵ「糖尿病・内分泌Up-Dateコース」では、内分泌学の基礎的事項の確認からはじまり、小児内分泌、循環器疾患、骨代謝異常、婦人科疾患に至るまでの幅広い分野における内分泌疾患についての有機的理解を深めることと、糖尿病および糖尿病合併症の分子機構についての洞察を深めることに主眼がおかれている。全体的には、出席率は良好であり、関心の高さを示すものと考えられ、ほぼ満足できる内容であるとの評価であったが、一方、講義内容は、やや難易度が高いと評価され、また、復習が十分ではなかった可能性もあり、内容理解が少し不十分であったかもしれない。今後は、基礎から臨床への内容的つながりをさらに重視した構成を考えたい。

科目名：臨床医学概論Ⅳ（医学科第4学年後期／必修）

履修者数：104 配布数：104 回収数：93 回収率：89.3%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.2	4.5	4.1	3.5	4.0	4.0	4.1	4.2	4.2	4.3	4.1	4.1	4.1
問14	問15	問16	問17	問18								
4.1												

＊評価に対するコメント

臨床医学概論Ⅳコーディネーター 郷 一 知

授業評価はほぼ4点台で、優れた授業とはいえない。系統的講義や学習からもれてしまう部分をカバーすることを目指し、医療の基本である緊急を要する病態への早急な対処のしかたや死を境にして生ずる移植医療の概念と実態を、社会的側面と臨床的側面から考えることを目指して開講したが、系別講義と重複してしまう部分が出てきてしまうため、本概論の独自性が出にくかったのではないかと考えている。系別講義や系統的学習では不足する、医学・医療の社会的側面への配慮や、情報を基盤にした個々の医師（学生）の問題意識を、提起するような概論の組み立てを考えていきたい。

科目名：加齢・老化と高齢者の医学（医学科第4学年後期／必修）

履修者数：104 配布数：104 回収数：85 回収率：81.7%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.4	4.1	3.6	3.9	4.1	4.0	4.1	4.0	4.0	4.0	3.9	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9												

＊評価に対するコメント

加齢・老化と高齢者の医学コーディネーター 奥村利勝

「加齢・老化と高齢者の医学」は昨年度新規に開講し本年が2年目にあたる。昨年の総合評価4.0に対して本年は3.9であり概ね満足出来る範囲と考えた。問14の総合評価の評価別人数を見ると、昨年度より5段階の3である普通と評価した学生の割合が増加していたことが0.1ポイントダウンの要因で、今後より魅力的な科目に改変する必要がある。筆記試験での正答平均率は昨年以上に高く、当該学生の十分な復習に敬意を表する。学生からのコメントでは試験問題数が多いとのコメントも散見されたが、大多数の学生は試験時間の3分の2以内に答案を作成していたことから実質的な問題はないと考える。

科目名：症候別・課題別講義（医学科第4学年後期／必修）

履修者数：106 配布数：106 回収数：70 回収率：66.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.2	4.0	3.5	4.0	3.6	3.7	3.9	3.9	4.0	3.9	4.0	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9												

＊評価に対するコメント

症候別・課題別講義コーディネーター 笹嶋唯博

症候診断学は、古くから多くの教科書が上梓されているように日常診断では極めて重要な領域である。そこで今回の講義は様々な症候を学際的、網羅的に編成された企画で、これほど集中的かつ専門的に講義を受けられる機会はないであろう。症候によっては診断が多岐におよぶもの、診断の優先順位が特定されるもの、あるいは重症度の高い疾患で治療が優先される項目もある。症候診断では、裾野が広いことから多くの講師により編成される必要があり、編成は容易ではない。また、大部分の講師は症候学に関する講義ノートは持ちあわせていないので、このために特別に準備されたものと思われる。講義内容の部分的な重複は避けられず、学生からの指摘があった点であるが、その調整は今後の課題である。

科目名：臨床検査学（医学科第4学年後期／必修）

履修者数：104 配布数：104 回収数：78 回収率：75.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.4	4.0	3.4	4.0	4.2	4.0	4.2	3.9	3.6	3.8	3.8	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.8												

＊評価に対するコメント

臨床検査学コーディネーター 伊藤喜久

科目構成、科目内容、総合評価の平均が3.8と応分の評価をいただいた。臨床検査はきわめて幅広い領域をカバーしており、ポイントをかなり絞りこんで講義項目を組みこんでいる。理解しやすかったか、目的が達成されたか、今後の学習意欲を増すものだったかの評価項目については、出来る限り諸君が興味、意欲を持って受講してもらえよう引き続き改善に努めたい。積極的に授業時間中、授業後に質問などをして、わかりにくさ、疑問点などを解決してもらえれば幸いである。担当の先生により講義に対する考え方、進め方などスタイルは当然異なる。この中で、単に知識を詰め込むのではなく、ものの考え方を学び取って欲しい。極めて限られた時間であるが、講義を基礎に5、6年生での実習を通じて、広く臨床検査の意義、面白さを十分理解いただけるはずである。

科目名：臨床薬剤・薬理・治療学（医学科第4学年後期／必修）

履修者数：104 配布数：104 回収数：88 回収率：84.6%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.3	4.0	3.4	4.1	4.2	4.2	4.3	4.2	4.2	4.2	4.2	4.4
問14	問15	問16	問17	問18								
4.2												

＊評価に対するコメント

臨床薬剤・薬理・治療学コーディネーター 松原和夫

臨床薬剤・薬理・治療学は、開講して2年目を迎えた。本科目は、モデルコアカリキュラムに沿った新しい医師国家試験の出題範囲に対して、薬理学分野で旧来のカリキュラムで不足していた部分を補う内容とすることを目的としてスタートした。昨年も学生から良好な評価を受けたが、本年度もほぼ良い評価を受けたと考える。昨年と本年の授業内容の変更点は、漢方医学の授業を倍の4コマとしたことである。この点は、多くの学生から好評を得た。また、学生からCBTの前の講義としても役に立ったという意見があったことは、4年後期にこのような授業を開講する意義が理解されたものと思われる。今後も、より良い授業となるように更に検討していきたい。

科目名：人間科学Ⅱ（看護学科第1学年・編入学第3学年後期／必修）

履修者数：70 配布数：55 回収数：55 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.1	3.9	3.6	2.6	3.4	3.7	3.6	3.7	4.0	4.0	3.7	3.6	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.6												

＊評価に対するコメント

人間科学Ⅱコーディネーター 藤尾均

看護学科1年生と編入学3年生に一般教養の一環として通年開講している、3単位45コマの必修科目である。医療・看護の諸問題を、哲学・倫理学・歴史学・社会学・文化人類学的観点から幅広く取り扱っている。今年度はコーディネーターによるオリエンテーション2コマの後、学長・病院長が新入生のモチベーションを高める講義を各1コマ、社会学と歴史・哲学の専任教員が各17コマ、哲学・倫理学の非常勤講師が7コマを担当した。評価の数値は残念ながら例年よりやや低めであった。批判的な意見として、「レポートの課題が今後の意欲を増すものでなかった」「授業中に指名して強制的に発言させるのは気に入らない」「年間を通して同じような内容をやっていた」「先生によって講義内容が選択科目と重複していた」「もっとシラバスに沿って行おうべきだ」「全体を通して何を目的としているのか分りにくかった」などが目に付いた。これらの意見に対しては、教員側から反論や弁解をしたい点もあるが、敢えて書かないことにする。批判を厳粛に受け止めて次年度以降の評価アップにつなげたい。

科目名：公衆衛生論（看護学科第1学年・編入学第3学年後期／必修）

履修者数：70 配布数：70 回収数：69 回収率：98.6%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.3	3.6	3.0	2.8	3.5	3.3	3.2	3.5	3.1	3.0	3.1	3.1	3.3
問14	問15	問16	問17	問18								
3.1												

＊評価に対するコメント

公衆衛生論コーディネーター 望月吉勝

この科目で扱う範囲は、国家試験でいえば、看護師での公衆衛生学、保健師での疫学・保健統計を含んでおり、習得しなければならない内容が多岐に渡ります。それで、開始時に「公衆衛生」全体の見取り図を説明して、今、どのあたりかを自ら確かめながら、学習を進めるように話しました。

死亡率の推移などを確かめるために、『国民衛生の動向』とそれを要約したカラー図説版も教科書として用いています。カラー図説版で特徴をつかんでから、更に詳細を知るためです。何冊もの教科書やプリントを並べて授業していたのですが、それが煩雑と感じた学生もいたようです。だが、専門職となる勉強では、何冊もの資料を見比べながら学習を進めることは通常のことです。

定期試験については、基本的な知識を確認するための問題と、計算演習したことを確認するための問題を出題すること、努力すべき目標を冬休み前に示しました。ところが、19名もが再試となり、初めてのことで当惑しました。

工夫を重ねて来た「疫学ノート」などのプリント類は、幸い好評のようでした。

科目名：形態機能学（看護学科第1学年後期／必修）

履修者数：60 配布数：59 回収数：58 回収率：98.3%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.9	4.2	4.0	3.0	3.2	3.6	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2	3.6	3.6
問14	問15	問16	問17	問18								
3.4												

＊評価に対するコメント

形態機能学コーディネーター 岩元 純

生理学というのは、医学の中心的な学問で、理解することに努力を要する学問である。しかし、理解するとその面白さに虜になってしまう学問でもある。以前は授業が終わると2、3名の熱心な学生がよく質問してきたものだったが、ここ数年来、学生が全く質問をしなくなってきた。去年はゼロだったが、今年もゼロだった。授業中に質問しても、熟慮して答えを述べる学生がいなくなった、授業中に具体的な要望を述べる学生も皆無になった。板書にしても、口頭で説明したものを重ねて書いて、それでも理解を得られたかどうかかわからない状態になった。かならず黒板の左側から右側へ書くように要望する学生もいる。わかりやすいという学生もいれば、わかりにくいという学生もいる。懇切丁寧であるという学生もいれば不親切であるという学生もいる。同じ授業に対して正反対のコメントを頂戴するようになってきたのも近年の特徴である。さて、来年度はどのようなご批判をいただくことになるのやら。

科目名：疾病論（看護学科第2学年通年／必修）

履修者数：60 配布数：60 回収数：60 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.4	4.1	4.0	2.9	3.5	3.3	3.5	3.8	3.4	3.4	3.6	4.0	3.5
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9												

＊評価に対するコメント

疾病論コーディネーター 岩 元 純

いつも同じような批判をいただいて恐縮しているが、適切な教科書がなかなか見つからない現状で、学生諸君には迷惑をかけている。しかし、個々の担当の先生方の努力のおかげで充実した講義がなされていることは、時々耳にするので安心している。授業評価は微妙であるが、学生の成績を見る限り、かなり好成績をとっているものの数が多く、全体として理解されているような印象をうけた。無論、好成績の一方で、あまり芳しくない成績のものもあり、これらの学生の学力向上にむけてコーディネーターとしては授業を担当される諸先生方にさらなる工夫をお願いしていく必要を痛感している。

科目名：代謝栄養学（看護学科第2学年通年／必修）

履修者数：60 配布数：60 回収数：60 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.6	3.9	3.9	3.0	3.5	3.1	3.4	3.5	3.6	3.6	3.6	3.6	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.6												

＊評価に対するコメント

代謝栄養学コーディネーター 木 村 昭 治

厳しい評価結果はほぼ前半の栄養学に集中しており後半の生化学分野は好意的なコメントをもらっている。前者の領域には本学で専任教官がいないため外部の講師をお願いしてきたが今年度より新たな講師に変更になった。講義内容には細かく立ち入れないのは当然であるがコアの部分ではシラバスの内容に沿ってやっていただけるものと認識していた。しかしながらこちらの意図がよく伝わらず内容に偏りがみられ後期の内容と重複した部分が多かったようである。この点に不満が集中していた。調整役として講師とのコミュニケーション不足を深く反省している。次年度ではこの点を改善するためまず講師の方におおまかな講義内容を提出して頂きこちらの希望する履修内容と刷り合わせを行い双方の意図を確認の上講師依頼をした。次年度授業開始前に再度確認し勉学上学生の不利にならぬよう徹底したい。次年度の改善を期待している。

科目名：看護研究「看護統計学」（看護学科第3学年通年／必修）

履修者数：69 配布数：66 回収数：62 回収率：93.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.4	4.3	3.5	3.2	3.4	2.8	3.0	3.2	2.6	2.3	2.6	2.4	2.7
問14	問15	問16	問17	問18								
2.6												

＊評価に対するコメント

看護研究「看護統計学」コーディネーター 望月吉勝

この科目は、研究するための知識とスキルを学び、4年生での卒業研究、卒業後の勤務先での問題解決・研究につなげることを意図しています。そのために、「研究のプロセス、特に質問紙を用いた調査研究」「看護学領域での研究、特に質的研究」「パソコンによるデータ解析演習」「卒業研究発表会への参加」という4つのパートから構成しています。

学会誌掲載の原著論文を手本として、10コマほどのPowerPointプレゼン、2頁抄録、研究計画書を作成する課題では、先人の研究成果を使わせてもらって、研究の疑似体験を試みました。また、学生自らが質問紙調査票に回答することで調査対象者の体験をし、その後それらのデータを用いて分析し、2頁抄録形式の短い論文を書くことで調査する側の体験もしてきました。自由記載には、よく分からないや、卒業研究が不安といったことが書かれていましたが、研究のプロセスに関して、体験的に学習してきたのです。守備範囲が明確な科目と比べると、努力する方向や到達点が分かり難いのですが、これまで学習してきたことを振り返ってもらいたいと思います。

実習企画（または演習企画）に対する学生評価

あなた自身について	問1 事前に配布された資料を読むなど予習をしましたか。
	問2 実習（演習）に毎回出席しましたか。
	問3 実習（演習）に積極的かつ真面目に参加しましたか。
実習（演習）計画	問4 実習（演習）の目的は履修要項やガイダンスで明確に示されましたか。
	問5 実習（演習）はおおむねスケジュールに沿って行われましたか。
	問6 学生数に対して指導担当者数は適切でしたか。
	問7 指導担当者は適切な指導能力を備えていましたか。
実習（演習）内容	問8 指導担当者間の連携は適切でしたか。
	問9 実習（演習）の内容は、関連する講義科目の内容と対応がとれていましたか。
	問10 事前に配布された資料は、実習（演習）を進める上で役立ちましたか。
	問11 実習（演習）によって技術を十分に習得することができましたか。
	問12 実習（演習）内容の難易度は適切でしたか。
実習（演習）環境	問13 課された提出物（レポートなど）の量や内容は適切でしたか。
	問14 実習（演習）は今後の学習への意欲を増す内容でしたか。
	問15 実習（演習）用の設備・機材・用具などは性能と量の面で十分でしたか。
	問16 安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。
総合評価	問17 学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
	問18 この実習（演習）は全体として満足できるものでしたか。

- ⑤ 強くそう思う（非常に良い）
 ④ やや思う（良い）
 ③ どちらとも言えない（普通）
 ② あまりそう思わない（あまり良くない）
 ① 全くそう思わない（良くない）

科目名：生命科学実習Ⅱ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：87 配布数：86 回収数：86 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.7	4.9	4.5	4.0	4.5	3.9	4.2	3.8	4.0	4.1	3.8	3.9	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.6	3.8	3.9	3.7	3.9								

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅱコーディネーター 谷本光穂

評価の単純平均は、一昨年は3.88、昨年度は3.98であり、今年は4.05と徐々に改善されているように見えるが、どの部分が改善されたのか、あまり意識をしていないので良くわからない。ところで、自由記載欄の記事から推察すると、自分たちの得た結果からどのような結論が導けるのか、また、どのような問題点が潜んでいるのか等を一人ひとり考察させようとする非常に評判が悪い。逆に、レポートの作成方法として、各表現、内容をこと細かく指導すると、いたって評判が良いようである。つまり自分で考え、まとめるといったことは苦手のようなものである。これはもっともなことで、高校までは、自ら実験を行い、レポートにまとめるといった作業の経験がほぼ皆無であることに起因している。一般教育の実習の指導の難しさはここにある。せっかく前期のチュートリアルで自学自習の習慣を身に付けるよう訓練されているのであるから、更にそれを生かすような指導方法を目指し、学生一人ひとりが納得し感動するような実験内容に改善できれば良いと思う。

科目名：生命科学実習Ⅲ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：88 配布数：85 回収数：85 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.8	4.7	4.3	3.9	4.4	3.8	3.8	3.2	3.9	4.3	3.8	3.8	3.9
問14	問15	問16	問17	問18								
3.5	4.1	4.1	4.0	3.9								

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅲコーディネーター 高橋龍尚

A組とB組で項目ごとの評価が大きく違う点に驚いています。この違いは、実習企画に対する評価というよりも、実習に対する姿勢や努力そして得られた充実感など評価者自身の評価のようにも感じられます。企画の内容に不十分さを感じた人がいる一方で難しすぎると感じた人もいます。今後の課題としては、これらのニーズに対応しながら個人ごとのレベルアップを少しでも促せるよう工夫したいと思います。

科目名：生命科学実習Ⅳ（医学科第1学年後期／必修）

履修者数：90 配布数：89 回収数：86 回収率：96.6%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.7	4.4	4.2	4.1	4.2	3.8	4.0	3.9	4.1	4.0	3.9	3.8	3.7
問14	問15	問16	問17	問18								
3.8	3.9	4.1	3.9	3.9								

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅳコーディネーター 渡部 剛

組織標本のスケッチ提出課題を減らしてほしいという学生からの意見を考慮して、昨年から思い切って提出課題を3分の1に減らし、その結果、授業評価の評点は4点前後と安定した。ただ、提出課題量を劇的に減らしたのにも関わらず、学生の予習量も提出レポートの質も年々低下する一方で、今度は採点・評価する教官の意欲が低下してきた。そこで、発想を転換して来年度からは評価方法を一新することを計画している。具体的には、毎回のレポート提出を原則的に廃止し、代わりに毎回の実習の冒頭に予習の程度を評価するためのプレテストを行う。このプレテストの点数と実習後のスライドテストの点数を総合して成績を評価する予定である。この成績評価方法の改革で、次年度以降は学生がきちんと予習をして実習に望み、有意義な実習時間を過ごしてくれることを期待している。

科目名：基礎医学実習Ⅰ（医学科第2学年後期／必修）

履修者数：98 配布数：98 回収数：97 回収率：99.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.5	4.9	4.7	4.7	4.8	4.1	4.7	4.4	4.6	4.7	4.4	4.3	4.4
問14	問15	問16	問17	問18								
4.7	4.5	4.7	4.6	4.7								

＊評価に対するコメント

基礎医学実習Ⅰコーディネーター 吉田 成孝

今年度の2年生は新々カリキュラム4年目で基礎医学実習Ⅰも昨年の反省点をふまえてマイナーチェンジを行った。系統解剖と脳解剖の時間配分を再検討し、放射線画像読影実習の内容の充実を行った。学生の評価自体は昨年度とほぼ同様であるが、例年通り充実した実習ができたものと考えている。指導者数の不足を指摘する声もあり、また、もっと丁寧な指導を望む声も聞かれた。教員側にも反省すべき点はあるが、何よりも学生諸君の自主的な取組みが肝心である事をこれからも強調していきたい。全体の枠組みとしては固まったといえようが、映像機器の使用の充実を今後の第一の課題とし、学生自身の動機付けと実習全体の目標達成に向けて、さらに工夫していきたい。

科目名：社会医学実習（医学科第4学年後期／必修）

履修者数：104 配布数：96 回収数：59 回収率：61.5%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.8	4.7	4.6	4.2	4.2	4.3	4.4	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.2	4.1	4.2	4.3	4.2								

＊評価に対するコメント

社会医学実習コーディネーター 清水恵子

社会医学実習として、衛生学・公衆衛生学と、法医学が合同の実習となった3年目である。学生が小グループに分かれて個別実習を行い、最後にプレゼンテーションによって全体で分かち合う形式に、両講座とも統一された初年度である。衛生学・公衆衛生学分野は、例年の如く卒業後の研究に役立つ様な、実際の研究に近い実習が実践された。学生の精力的参加により、実り多い実習であった。法医学分野の実習内容は、以前法医学実習に独立した時間が確保されていた頃、学年全体で行っていた実習内容を一部変更して行った。法医学実務における各種検査を行うことで、科学捜査の極一端を体験し、そこから多様な考察を学生に自由に行って頂いた。新形式実習の初年度であった為、来年度へ向けて改善点も明らかとなった。授業評価の評点は平均4点を超え、社会医学実習開始以来年々向上しており、学生サイドからの評価はおおむね好評と言える。

科目名：人間科学実習（看護学科第1学年・編入学第3学年後期／必修）

履修者数：60 配布数：60 回収数：59 回収率：98.3%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	4.8	4.5	4.0	4.4	3.6	4.0	3.8	3.7	4.2	3.6	3.5	3.2
問14	問15	問16	問17	問18								
3.3	3.9	3.9	3.9	3.8								

＊評価に対するコメント

人間科学実習コーディネーター 林 要喜知

評価の平均点（問4～18）は3.78であった。一昨年（3.98）や昨年（4.12）と比較すると、今年はかなり低めである。評価項目別では、「（1）レポート量や提出期限が適切であるか（問13＝3.2）、（2）学習意欲を増す内容であったか（問14＝3.3）、（3）実習の難易度が適切か（問12＝3.5）」等が厳しく評価された。学生のコメントから判断すると、「（1）に対してはレポート量が多い、（2）では学習内容と将来の医療現場での仕事との関わり方がわからない、（3）は実験前の内容説明の方法などが不十分である」等の意見が反映されていると思われる。また、実習時間をかなりオーバーする課題改善を要求する意見もあった。比較的高い評価を得たものは、「（4）ガイダンスでの説明は明確であり（問4＝4.0）、（5）おおむねスケジュール通りに実習がなされた（問5＝4.4）。さらに、（6）指導者も適切であった（問7＝4.0）」などである。ハードな実習であったが、課題に関連する発展的な説明もあり、実習自体はとても有益であるという意見もあった。今回の学生評価を真摯に受けとめ、より充実した内容にしていきたいと考えている。

科目名：生体観察実習（看護学科第1学年後期／必修）

履修者数：60 配布数：60 回収数：59 回収率：98.3%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.7	4.8	4.5	4.1	4.4	3.9	4.1	3.8	3.7	4.0	3.4	3.5	3.5
問14	問15	問16	問17	問18								
3.8	3.7	3.9	3.8									

＊評価に対するコメント

生体観察実習コーディネーター 岩 元 純

生体観察実習は、ミニチュア版の生理学実習と解剖学実習をあわせたものである。ことは、レポートの成績だけをみると、例年よりもかなり低くでてしまったので心配していたが、学生側の授業評価とあわせてみると興味深いものがある。しかし、毎年の学生気質にはそれぞれの学年で特徴があり、また年を追うごとに少しずつ変化していくので、学年担任としては、この学年が今後どのようなようになるか楽しみである。期待をこめて見守っていきたい。

科目名：基礎看護技術学Ⅰ（看護学科第1学年後期／必修）

履修者数：60 配布数：60 回収数：59 回収率：98.3%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.5	4.7	4.6	4.5	4.3	3.9	3.7	3.5	4.2	4.5	3.6	3.8	3.5
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0	4.0	4.2	3.5	3.8								

＊評価に対するコメント

基礎看護技術学Ⅰコーディネーター 升 田 由美子

今年度より、ポケット版「看護技術学習ガイド」を作成し、自己の看護技術学習状況や達成度がわかりやすくなるようにした。また、実習室アワーを設定し教員からの指導を受けやすくなるように配慮した。技術チェックの回数も増やし、看護実践能力獲得につながるようなプログラムとした。学生の皆さんは教員の期待以上に空き時間を活用し、看護技術の習得に努力していた。関連する講義科目の内容と対応、事前配布資料に関して4点以上の評価であり、効果的な演習内容だったと思われる。看護技術習得について例年と同様に評価は低い（3.6）。これは、看護技術が授業のみで身に付くものではなく、継続した自己学習を行って初めて習得できることを学生自らが正しく認識していることの現れであろう。自由記載に述べられていた内容は、次年度に向けての貴重な示唆とし、今後とも学生の看護実践能力向上のために努力したい。

科目名：実践看護技術学（看護学科第3学年通年／必修）

履修者数：69 配布数：68 回収数：68 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.0	4.8	4.5	4.3	4.3	4.1	4.3	4.0	4.3	4.4	3.6	4.0	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.2	4.0	4.2	4.1	4.2								

＊評価に対するコメント

実践看護技術学コーディネーター 服部 ユカリ

学生の自己評価3項目の平均は4.4であり、例年通り自己評価は高い。

演習計画の5項目の平均は4.2で高かった。

演習項目6項目の平均は4.1であり、この中で最も低かったのは、技術の習得に関する項目で3.6であった。4年制の看護系大学では、卒業生の看護実践能力を向上させることが大きな課題になっている本学でも同様の課題があり、今後さらにこの点について努力と工夫を続ける必要がある。

演習環境の3項目の平均は4.1であり昨年度より高くなっており充実に努めた効果が出ていると思う。

全体については4.2であり、これまでで最も高い評価であり、この科目の内容が充実してきたことの現れと言えよう。

臨地看護学実習企画に対する学生評価

あなた自身について	問1 事前に配布された資料を読むなど、予習をしましたか。 問2 実習に積極的かつ真面目に参加しましたか。
実習計画	問3 実習目的・実習目標はガイダンスで明確に示されましたか。 問4 実習はおおむねスケジュールに沿って行われましたか。 問5 学生数に対して指導教員数と実習指導者数は適切でしたか。 問6 指導教員と実習指導者の連携はとれていましたか。
実習内容	問7 実習の内容は、関連する講義科目と対応がとれていましたか。 問8 受け持ち患者の看護の難易度（コミュニケーションも含めて）は、適切でしたか。 問9 看護過程について、指導教員や実習指導者から適切な助言が得られましたか。 問10 看護技術を実践する機会が多く与えられましたか。 問11 カンファレンスで有意義な討議・討論が行われましたか。 問12 課された実習記録・レポートなどの量は適切でしたか。 問13 実習によって看護職者をめざす意欲が十分に高まりましたか。
実習環境	問14 実習場の設備・機材・用具・物品等は必要十分な質と量でしたか。 問15 安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問16 学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総合評価	問17 この実習は全体として満足できるものでしたか。

- ⑤ 強くそう思う（非常に良い）
④ やや思う（良い）
③ どちらとも言えない（普通）
② あまりそう思わない（あまり良くない）
① 全くそう思わない（良くない）

科目名：基礎看護学実習（看護学科第1学年後期／必修）

履修者数：60 配布数：58 回収数：57 回収率：98.3%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.6	4.6	4.7	2.9	4.1	4.1	4.5	4.1	4.4	3.5	4.2	4.0	4.7
問14	問15	問16	問17	問18								
4.5	4.4	4.4	4.6									

＊評価に対するコメント

基礎看護学実習コーディネーター 升 田 由美子

今年度は、ノロウイルス感染の影響を受け実習期間が当初予定とは変更になった。実習の前半2日間と後半3日間の間隔が約1か月あり、しかも後期試験を挟んだ日程となった。このアクシデントにも拘らず、学生の皆さんは実習に大変に積極的に取り組み、有意義な実習となった。授業評価もほぼ4点台であり、問17が4.6であったことから、実習は効果的に行えたと考える。「問10看護技術を実践する機会」は例年得点が低く、学生による体験の差が反映している項目である。次年度以降は看護技術を実践する機会を増やすように、さらに積極的に病棟サイドと連絡・調整を行いたい。また、「この実習を体験して初めて、実際の患者がどのような存在かを理解できた」という学生の反応が多くあった。早期に病棟実習を行なうことが患者理解につながり、その後の学習をより効果的なものにする。実習の実施時期を検討することが必要であろう。

科目名：看護過程論実習（看護学科第3学年後期／必修）

履修者数：60 配布数：56 回収数：56 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.7	4.9	4.5	3.5	3.6	3.6	4.1	3.9	4.1	3.1	4.0	3.6	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.2	4.3	4.0	4.1									

＊評価に対するコメント

看護過程論実習コーディネーター 升 田 由美子

どの学生もこの実習には積極的に取り組んでおり、問1、2が4.7、4.9と高値であったことと一致しています。今年度は大学病院の事情により、実習の一部に日程変更が生じました。しかし、実習目的は例年と同様に達成されていたと考えます。総合評価4.1とほぼ満足できる実習であったようです。自由記載には、臨床で指導にあたっていただいた看護師さんへの感謝の言葉が多くありました。よい実習にしたいという共通の目標の元に大学病院看護部、病棟師長、看護師の皆様と連携が図れた成果と考えます。

また、教員の指導体制は1病棟に教員1名で担当すべきという意見が複数ありました。初めて看護過程を自分で展開すること、患者様とコミュニケーションをとりながら情報収集・アセスメント・看護援助を実施することは思考・行動ともに高度な内容であり、教員の適切な助言・指導が必要です。指導体制は次年度に向けて改善を図りたいと思います。

科目名：老年看護学実習（看護学科第3学年後期／必修）

履修者数：59 配布数：49 回収数：49 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.7	4.7	4.2	4.5	4.0	3.7	4.0	4.1	4.	4.0	3.9	3.7	3.9
問14	問15	問16	問17	問18								
3.8	3.9	3.9	4.0									

＊評価に対するコメント

老年看護学実習コーディネーター 服部 ユカリ

学生の自己学習に関する2項目は共に4.7であり、例年と同じく自己評価は高い。

実習計画に関する4項目の平均は4.1でありこれも全体としては高い評価である。学生の人数と指導者数についての項目は4.0で昨年度より高い。今年度から指導教員を1名増やし、病棟実習では学生4～5人に一人指導教員が付くようにした。教員の確保がたいへんであったが、その甲斐があったと言える。

実習内容に関する7項目の平均は3.9であり今回の結果の中では、やや低く、今後も実習内容の充実に努めたい。

実習環境の3項目の平均は3.9であった。実習施設との関係は強まっており、関係も徐々に整ってきているので、さらに努力したい。

全体評価は、4.0で比較的良好な実習ができたと判断しても妥当と思う。

科目名：小児看護学実習Ⅰ（看護学科第3学年後期／必修）

履修者数：59 配布数：49 回収数：49 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.4	4.6	4.1	4.5	4.1	3.6	3.7	4.3	3.3	3.2	3.5	4.1	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.1	4.1	4.1	4.1									

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅰコーディネーター 岡田 洋子

健康な小児と家族・社会（小児の特徴、成長・発達、発達課題、小児の健康と家族・社会）に関する学習が終了し、学習内容がストレス・健康問題を有する小児と家族の理解・看護へと進行していく段階で、この保育園実習をプランしている。目的は、小児と接する体験が極めて少ない環境で育ってきた学生が、机上で学んだ知識を体験を通してより深く理解することである。

具体的には：

- 1)小児の特徴、小児の成長発達・発達課題、
- 2)小児の社会化のプロセスにおける家族（社会）の役割・機能
- 3)小児の保育に必要な基礎的知識・技術・態度の実際

Ⅱ．評価に関する感想：

評価の平均は4.1と例年と同様である。学生自身の取り組みに関する自己評価は高く、4.5前後であった。実習内容に関する評価の中で、「看護技術を実践する機会が多く与えられましたか」が最も低く3.2であった。小児看護学実習Ⅰの目的が、健康な小児とその保育に関する理解であるため、使用評価表（臨地看護学実習用）に限界があると考えられる。

学習課題への準備・動機づけ、実習時期、実習目標と方法、実習への主体的取り組み等について妥当な結果と評価する。

科目名：地域保健看護学実習Ⅰ（看護学科第3学年後期／必修）

履修者数：59 配布数：49 回収数：49 回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.7	4.7	4.6	4.4	4.2	4.2	4.3	4.1	4.3	3.6	4.1	3.7	4.1
問14	問15	問16	問17	問18								
4.2	4.3	4.2	4.2									

＊評価に対するコメント

地域保健看護学実習Ⅰコーディネーター 北村 久美子

3学年後期の実習である。目的は、地域で生活している人々を対象とした看護を体験し地域保健・看護活動を実践できる基礎的能力を養うことである。本実習は、10月、11月にわたる大学近郊の市町村役場と市内の訪問看護ステーションでの実習である。

市町村役場の実習は、美瑛町・比布町・鷹栖町・東川町・中富良野町および初めて実習を受けて頂いた南富良野町役場でした。南富良野町は通学不可能なため本実習開始以来初めて学生は1週間現地に滞在しての実習であった。また、訪問看護ステーションは例年受けて頂いている市内5施設であった。教育効果をねらった講義・演習・実習を一貫させた教育プログラムの基に実習への強い動機付けをはかるため実習前には町の地区視診（地区診断）、看護技術演習・実技試験を行った。教育体制として恒例の実習指導者との実習評価会と実習打ち合わせを行い教員と実習指導者とともに綿密な実習準備を行った。

今年の学生評価は、昨年度とはほぼ同様の4.2であった。学生自身が意欲的に実習に取り組んだ成果と思われる。3学年における宿泊での実習は初めてのことであり教員・指導者共々緊張の連続であったが、学生には地域医療の現状を体感できた満足感がみられた。町の人々から「旭医大から来たの」「また来てね」などの声が学習意欲を高めているように思えた。今後も実習指導者とともに学生にとって実り多い実習を目指したい。

科目名：成人看護学実習Ⅰ（看護学科第4学年前期／必修）

履修者数：62 配布数：54 回収数：49 回収率：90.7%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.3	4.5	4.1	4.2	3.7	3.6	3.8	4.2	3.8	4.0	3.8	3.8	3.9
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0	3.8	3.7	3.8									

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅰコーディネーター 荒 ひとみ

「成人看護学実習Ⅰ」は、主に周手術期の患者を対象に外科系病棟（消化器系・循環器系）2病棟と手術室見学および学内での看護技術演習で構成されている。学生は病棟実習2週間の間で患者1名を受け持ち周手術期の看護過程を展開している。全体的な評価として、看護技術を実践する機会については得点が高いのに対して、看護過程について適切な助言を受けたかは低い。これは、急性期の実習であるため、学生は目前の事象の対処を行うのが精一杯で、看護過程の急速な展開に追いつかない現状を示していると考えられる。看護技術も根拠に基づいたものである上、看護過程と関連して実践されるものであるという実感を持って実習を行えるような工夫が必要である。

科目名：成人看護学実習Ⅱ（看護学科第4学年前期／必修）

履修者数：62 配布数：54 回収数：50 回収率：92.6%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.3	4.4	4.2	4.2	4.1	3.9	3.9	4.1	4.0	3.5	3.9	3.9	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0	4.0	3.9	4.0									

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅱコーディネーター 阿部修子

「成人看護学実習Ⅱ」は、主に慢性疾患患者を対象に、内科系の2病棟で実習を行っている。評価を見ると「看護技術を実践する機会が多く与えられたか」という項目が、3.5と低い。これは、比較的セルフケアレベルの高い患者様を受け持たせていただく場合が多く、清潔に関するケアなどの看護技術を実践する機会が少ないためと考える。しかし今年度の総合評価は、4.0と比較的高い値を示しており、看護技術の実践の機会が少なくとも学生には、満足のできる実習となっていたようである。3週間を継続して看護過程を展開する実習で、適切な受け持ち患者の選定や、臨床指導者の助言が得られていたことが満足感につながっていたと考えられ、実習病棟の皆様のご協力によるところが大きいと考える。これからも、実習病棟と連携をとりながら、充実した実習となるよう工夫していきたい。

科目名：母性看護学実習（看護学科第4学年前期／必修）

履修者数：62 配布数：51 回収数：47 回収率：92.2%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.5	4.5	4.2	4.2	3.7	4.0	4.2	4.1	4.0	4.2	3.8	3.5	3.5
問14	問15	問16	問17	問18								
4.0	4.1	3.6	3.9									

＊評価に対するコメント

母性看護学実習コーディネーター 黒田 緑

多くの学生が母性看護学実習に真摯な態度で臨み、事前準備をするなど学生の前向きな姿勢がうかがえる。一方、相対的に低い評価であった「有意義なカンファレンスの実施」や「看護職者を目指す意欲の喚起」は教育する側の意図が学生に十分に伝わらなかった結果と考える。なお、「人権に対する配慮」の評価結果は看過できない事柄と受け止め、上記と合わせ今後の実習指導の改善に務めたい。

実習を欠席する学生がしばしば見受けられるが、やむを得ない事情を除き、望ましいことではないと考える。

科目名：小児看護学実習Ⅱ（看護学科第4学年前期／必修）

履修者数：62 配布数：57 回収数：53 回収率：93.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.3	4.4	4.1	4.3	3.8	4.2	3.7	4.0	4.0	3.6	3.8	4.0	3.8
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9	4.1	4.1	4.0									

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅱコーディネーター 岡田 洋子

学生自身についての自己評価は、4点台と高い。実習計画では、「学生数に対して指導教員と実習指導者数は適切か」が最も低く3.8、他の項目は4点台である。評価が最も低かった「指導教官と実習指導者の連携は取れていたか」は、2.9から4.2へと評価が上がっている。指導者・担当教員はじめとする日頃の取り組みの結果と評価する。実習内容では、「看護技術を実践する機会が多くあたえられましたか」が3.6と最も低い。昨年から小児入院病棟が2病棟から1減となり、学生の病棟実習時間も2週から1週減となり、外来実習等に変更した影響が推測する。実習環境の評価は4点前後、総合評価も4.0と高い。看護教育の大学化が進む一方で、新卒者の基礎的な看護実践能力の低下が指摘され、本学においても解決すべく現在カリキュラム改正に向け検討を進めている。

科目名：精神保健看護学実習（看護学科第4学年前期／必修）

履修者数：62 配布数：53 回収数：49 回収率：92.5%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.2	4.4	4.2	4.3	3.9	4.1	4.2	4.0	4.2	3.4	4.0	4.2	4.0
問14	問15	問16	問17	問18								
4.1	4.2	4.3	4.3									

＊評価に対するコメント

精神保健看護学実習コーディネーター 新開 淑子

本実習では、精神医療における看護の役割・機能および精神を障害された個人とその家族の理解を深め、精神の健康回復への援助を修得すること、さらに援助過程を通して、自己洞察しえる能力を養うことを目的としている。今回の学生評価で4.0以下の項目は、問5と問10であった。問5は学生数に対する指導教員数や実習指導者数の適切さであるが、各実習グループに1名の指導教官を配置できていないことが指摘されていると考える。しかし昨年までみられていた学生からの不満の声は今年度は聞かれていない。これは指導教官が常時いない分、学生の主体性を重視したことが積極的な実習への取り組みにつながり、逆に学生の実習達成満足度が得られたと考える。またそれを支えるために、指導教官と実習指導者の協働・連携を強化し、充実した指導体制を運営することができていたと考える。問10は看護技術の一つであるということが学生の中にうまく認識されていなかったためと考える。今後、精神看護に必要な援助技術とは何か、他領域との違いを明確にした上で、実習指導者や指導教官が協働し、学生指導に反映されるよう検討していく必要がある。

科目名：地域保健看護学実習Ⅱ（看護学科第4学年後期／必修）

履修者数：72 配布数：68 回収数：63 回収率：92.6%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.5	4.4	4.3	4.2	3.6	4.3	4.2	3.7	4.2	2.8	4.0	3.4	3.6
問14	問15	問16	問17	問18								
3.9	4.1	4.2	4.0									

＊評価に対するコメント

地域保健看護学実習Ⅱコーディネーター 北村 久美子

地域保健看護学実習Ⅱにおける実習施設は、北海道庁から言い渡された上川保健所と富良野保健所であった。看護系大学の増加に伴い、昨年度より2カ所で2週づつの実習となった。今年度も同様に、保健所の実習指導者に大学まで来て頂き打ち合わせ会議を開催し、その後も詳細に連携を取り実習準備を行った。また、実習マニュアルを作成するなど学生が実習に興味・関心が持て主体的に取り組めるよう方法論を大きく改善した。

その結果、学生評価は昨年度と比べ総合評価が0.5ポイント上がり4.0ポイントであった。1グループの学生数が16～17名と多く、しかも殆ど看護師就職希望者で保健師国家資格に直結する保健師活動に関心を向けることは例年、並大抵のことではない。学生にとって満足感が得られ学習成果のあがる実習指導を行うことは、日々、教員と指導者の連携・協働体制がなければ成立しないことを実感し、指導者の熱意ある姿勢に感謝である。



鳥沼公園（富良野市）

平成19年度 入 学 式

医学科・看護学科の入学式が4月6日（金）10時から本学体育館において挙行されました。

式では、医学科90名、看護学科60名、看護学科第3学年編入生10名、合わせて160名の新入生を代表

して医学科 赤木康司くんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに、大学生活の第一歩を踏み出しました。



平成18年度 学位記授与式

平成18年度学位記授与式が、3月23日（金）10時30分から本学体育館において挙行されました。

本学室内合奏団が奏でる調べのなか入場し、医学科95名、看護学科71名、合わせて166名の卒業生の各代表へ、学長から学位記が授与されました。

引き続き、博士課程8名、論文博士3名、修士課程8名の各代表にも学位記が授与されました。

なお当日は、成績優秀者及び課外活動で顕著な成果を上げた者への学生表彰も行われました。



▲学位記授与式（医学科）



▲学位記授与式（看護学科）



▲成績優秀による表彰



▲課外活動による学生表彰

平成19年度 医学科・看護学科新入生合同研修会が実施されました

平成19年度医学科・看護学科新入生合同研修会が4月9日（月）10日（火）の2日間にわたり実施されました。例年は、入学式があった日から一週間を挟んで実施されていましたが、一週間も授業を受けてからの新入生合同研修会では、「新鮮味もなく緊張感も少ない」という声もあり、本年は入学式の翌日に開催された恒例の学生主催の新入生歓迎行事（新歓合宿）を挟んでの合同研修会となったことにより、緊張感と疲労感のためなのか私語も少なく真剣に研修に取り組む姿が印象的でした。

一日目は、9時から看護学科棟大講義室にてグループ毎に着席し、塩野副学長の挨拶に始まり、医学科学年担当の生命科学 林教授のオリエンテーションを受けた後、医学科、看護学科に別れて、医学科は早期体験実習委員会委員長である法医学講座の清水教授から看護学科は学年担当でもある看護学講座の黒田教授から今後の学習展望及び医療従事者としての心構えの説明を受けました。

午後からは、旭川消費者協会副会長（事務局長）の宮島睦子氏による「悪質商法の実態と防止策」、本学医学部微生物学講座の若宮伸隆教授による「エ

イズの現状とその課題について」、同じく本学医学部内科学講座（消化器・血液腫瘍制御内科学分野）鈴木康秋助教による「お酒との正しいつきあい方」、及び本学内科学講座（循環・呼吸・神経病態内科学分野）長谷部直幸准教授による「医学生らしい生活習慣のすすめ」の講演を聞き一日目が終了しました。

二日目の午前は、グループ毎に分かれて「主体的な学習への取り組み方について」、「どのような医療従事者を目指したいか」という課題についての討論とグループ代表による発表会が行われました。最初はぎこちなかった討論も時間が経つにつれて真剣さを増し白熱した意見を戦わせるほどになりました。また、発表にあたっては、さっきまで寝ていたかと思われる人物がここぞとばかりに流暢なスピーチで会場を沸かせてくれたり、イラストなどに隠れた才能を発揮したりと驚かされる場面が多々ありました。

午後からは、グループ毎に分かれて救急蘇生実習及び手話の講習を受け、医療現場に携わる道を選んだ者として、ぎこちない動きの中にも雰囲気をも十分に味わったようでした。



▲講演風景



▲討論発表



▲救急蘇生



▲講演風景



▲手話の講習



▲救急蘇生

教員の異動

H19.3.31	定年退職	医学部内科学講座(循環・呼吸・神経病態内科学分野)	教授	菊池健次郎
H19.3.31	定年退職	医学部物理学	教授	谷本光穂
H19.3.31	辞職	医学部寄生虫学講座	助教授	山崎浩
H19.3.31	辞職	病院耳鼻咽喉科	講師	今田正信
H19.4.1	昇任	医学部寄生虫学講座	准教授	中尾稔
H19.4.1	昇任	医学部看護学講座	講師	一條明美
H19.4.1	昇任	病院精神神経科	講師	田村義之
H19.4.1	昇任	病院精神神経科	講師	稲葉央子
H19.4.1	採用	医学部看護学講座	教授	加藤千津子
H19.4.1	採用	医学部救急医学講座	講師	小北直宏
H19.4.1	転出	医学部看護学講座	教授	新開淑子
H19.5.7	辞職	医学部法医学講座	准教授	安積順一
H19.5.10	昇任	教育センター	教授	蒔田芳男

医大祭2007のお知らせ

旭川医科大学大学祭実行委員会

実行委員長 高橋 未来

美瑛の丘を吹く初夏の風とともに、今年度も医大祭の季節がやってまいりました。今年の医大祭のテーマは「新種発見! 旭医ジャングル 〜この週末は動物園に負けない〜」となっています。このテーマには、学生や来場されたお客様に単に医大祭を楽しんでいただくだけではなく、世間一般の目には触れにくい旭川医科大学の新しい一面を知ってほしいという願いがこめられています。

「君学生? どこ? 教育大?」「へえ、医大生なんだ。将来何科になるの?」「白い巨塔みたいなことってホントにあるの?」「手術の練習とかしてるの?」この様な質問は、医大生をやっていると、特に初対面の方から非常に多く受けます。私たち在校生からしてみると非常に基本的な質問ですが、このような質問を受けるたびに、いかに医学教育が一般の方に理解されていないかということを痛感させられます。

昨今、僻地の医療過疎、名義貸し問題、医療ミス、安楽死問題、そして違法な移植など、医療に対する

不審・不信・不満感が高まっています。その中で「医大」という存在も、いわばジャングルの様な未知の領域という感が拭えずにいると思われます。今回の医大祭を通じて、地域の皆様には病院だけではない旭川医科大学を見ていただくことで、新しい一面、すなわち「新種」を発見していただきたいと思っております。また、私たち学部学生を含め、教職員の皆様等「旭医ジャングル」に棲む方々にも、医大祭を通じて普段とは異なった新しい「社会的な存在」としての旭川医科大学を「発見」し、医大はどうあることを望まれているのか、これからの医大はどこへ向かうべきなのかを一考していただく機会になれば幸いです。

色々と理念の話が続きましたが、今年も医学展や公開講座はもちろん、各種模擬店やお笑いライブ、著名人による講演会、フリーマーケット等の企画を用意しております。初夏の一日を有意義なものになるよう、医大祭スタッフ一同、懸命に準備をしてお待ちしております。